

木曾路名所圖會  
四

ル 3  
3261  
5





ル 3  
239  
卷 5

木曾路名所圖會

卷之四

門 几 3  
3261  
卷 5

木曾路名所圖會卷之四

目錄

- 上諏方神社 三十九番末御供所
- 高嶋城 夜ヶ寄
- 天龍川水源 御射山
- 上和田 大門嶺
- 石割坂 蘆田
- 姨捨山 望月
- 城光院 望月津牧
- 八幡 八幡宮
- 塩灘 駒形社
- 諏方温泉 大御手洗
- 長窪 海野平
- 角摩川 角摩川
- 筑摩川 筑摩川
- 石馬圖 石馬圖
- 須波乃湖 須波乃湖
- 富士山眺望 富士山眺望
- 和田大嶺 和田大嶺
- 石荒坂 石荒坂
- 更級 更級
- 大伴神社 大伴神社
- 瓜生坂 瓜生坂
- 川中島古戰場 川中島古戰場
- 相生松 相生松



○ 岩村田

○ 追分

○ 諏方祠

○ 寛石

○ 熊野権現

○ 横川開隘

○ 松井田

○ 天馬宮

○ 繪馬宮

○ 飯綱宮

○ 御湯釜

○ 辨財天

○ 橋本

○ 住吉祠

○ 北陸道別路

○ 蓼科神社

○ 輕井澤

○ 信濃上野塚

○ 百合若足跟石

○ 八幡宮

○ 大御所

○ 觀音堂

○ 中身門

○ 稻荷堂

○ 石階

○ 原一村

○ 忍ぶ原

○ 浅間嶽

○ 菅掛

○ 碓日嶺

○ 刻石坂

○ 日射拔岩

○ 妙義山

○ 本香社

○ 御喜香

○ 回廊

○ 石階

○ 大黒天

○ 安中

○ 小田井

○ 浅間山

○ 塩沢

○ 坂本

○ 園山坂

○ 波右衛門

○ 神樂社

○ 辨財天

○ 飯綱

○ 石階

○ 鳥居

○ 板鼻

○ 烏川

○ 高崎

○ 佐野長者趾

○ 金鑽社

○ 岡部忠澄趾

○ 熊谷

○ 久下

○ 鳩巢

○ 氷川神社

○ 馬場

○ 調神社

○ 菟吉稻荷

○ 王子社

○ 神明社

○ 佐野舟橋

○ 会加野

○ 上登武彦塚

○ 普濟寺

○ 熊谷寺

○ 吹上

○ 桶川

○ 大宮原

○ 燒茶坂

○ 縁切坂

○ 稲荷社

○ 田畑八幡

○ 定家卿宮

○ 幸社

○ 深谷

○ 蓮生法師墳

○ 箕田八幡宮

○ 上尾

○ 針替村

○ 蕨

○ 板橋

○ 飛鳥山

○ 根津社

○ 佐野順世蹟

○ 新町

○ 岡部原

○ 親音堂

○ 熊谷重實古城

○ 大宮

○ 浦和

○ 戸田川

○ 平塚祠

○ 富士権現

○ 湯瀨天神社

○ 貫前神社

○ 琵琶窪

○ 橋本

○ 辨財天

○ 御湯釜

○ 飯綱宮

○ 繪馬宮

○ 天馬宮

○ 松井田

○ 横川開隘

○ 熊野権現

○ 寛石

○ 諏方祠

○ 追分

○ 岩村田

○ 八幡宮

○ 原一村

○ 石階

○ 稻荷堂

○ 中身門

○ 觀音堂

○ 大御所

○ 八幡宮

○ 百合若足跟石

○ 信濃上野塚

○ 輕井澤

○ 蓼科神社

○ 北陸道別路

○ 住吉祠

○ 若宮八幡

○ 安中

○ 石階

○ 大黒天

○ 回廊

○ 御喜香

○ 本香社

○ 妙義山

○ 日射拔岩

○ 刻石坂

○ 碓日嶺

○ 菅掛

○ 浅間嶽

○ 忍ぶ原

○ 板鼻

○ 鳥居

○ 石階

○ 飯綱

○ 辨財天

○ 神樂社

○ 波右衛門

○ 園山坂

○ 坂本

○ 塩沢

○ 浅間山

○ 小田井

○ 日本武尊

○ 新田





上<sup>うへ</sup> 坂<sup>さか</sup> 方<sup>かた</sup>  
 富士山遠<sup>ふじさんとほ</sup> 糸<sup>いと</sup>

麦<sup>こむぎ</sup> け<sup>け</sup> け<sup>け</sup>

富士<sup>ふじ</sup>  
 山<sup>やま</sup>  
 遠<sup>とほ</sup>  
 糸<sup>いと</sup>

代<sup>よ</sup> 明<sup>あき</sup>

本<sup>ほん</sup> 曾<sup>そう</sup> 路<sup>ろ</sup> 名<sup>な</sup> 所<sup>しよ</sup> 圖<sup>ず</sup> 會<sup>かい</sup> 卷<sup>まき</sup> 之<sup>の</sup> 四<sup>よ</sup> 目<sup>め</sup> 録<sup>ろく</sup>  
 終<sup>つひ</sup>

妻<sup>つま</sup> 急<sup>いそ</sup> 稻<sup>いな</sup> 荷<sup>かり</sup>  
 聖<sup>せい</sup> 堂<sup>どう</sup>

日<sup>に</sup> 本<sup>ほん</sup> 橋<sup>はし</sup>  
 神<sup>かみ</sup> 田<sup>の</sup> 社<sup>しろ</sup>

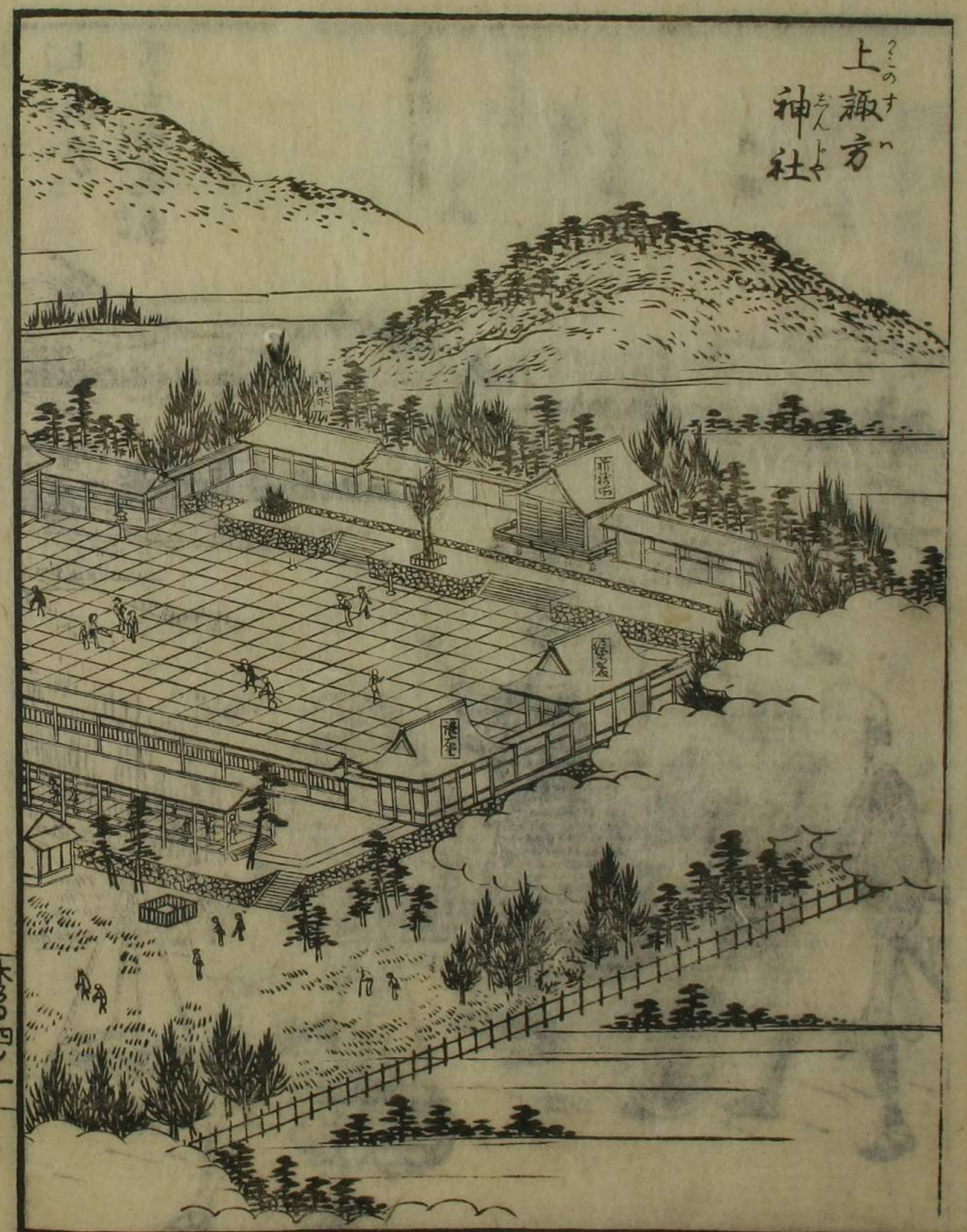
耕<sup>こ</sup> 牛<sup>うし</sup> 頭<sup>かぶ</sup> 天<sup>てん</sup> 王<sup>おう</sup>  
 社<sup>しろ</sup> 八<sup>はち</sup> 木<sup>き</sup>

僧<sup>そう</sup> 吉<sup>きち</sup> 社<sup>しろ</sup>

人<sup>ひと</sup> 丸<sup>まる</sup> 社<sup>しろ</sup>

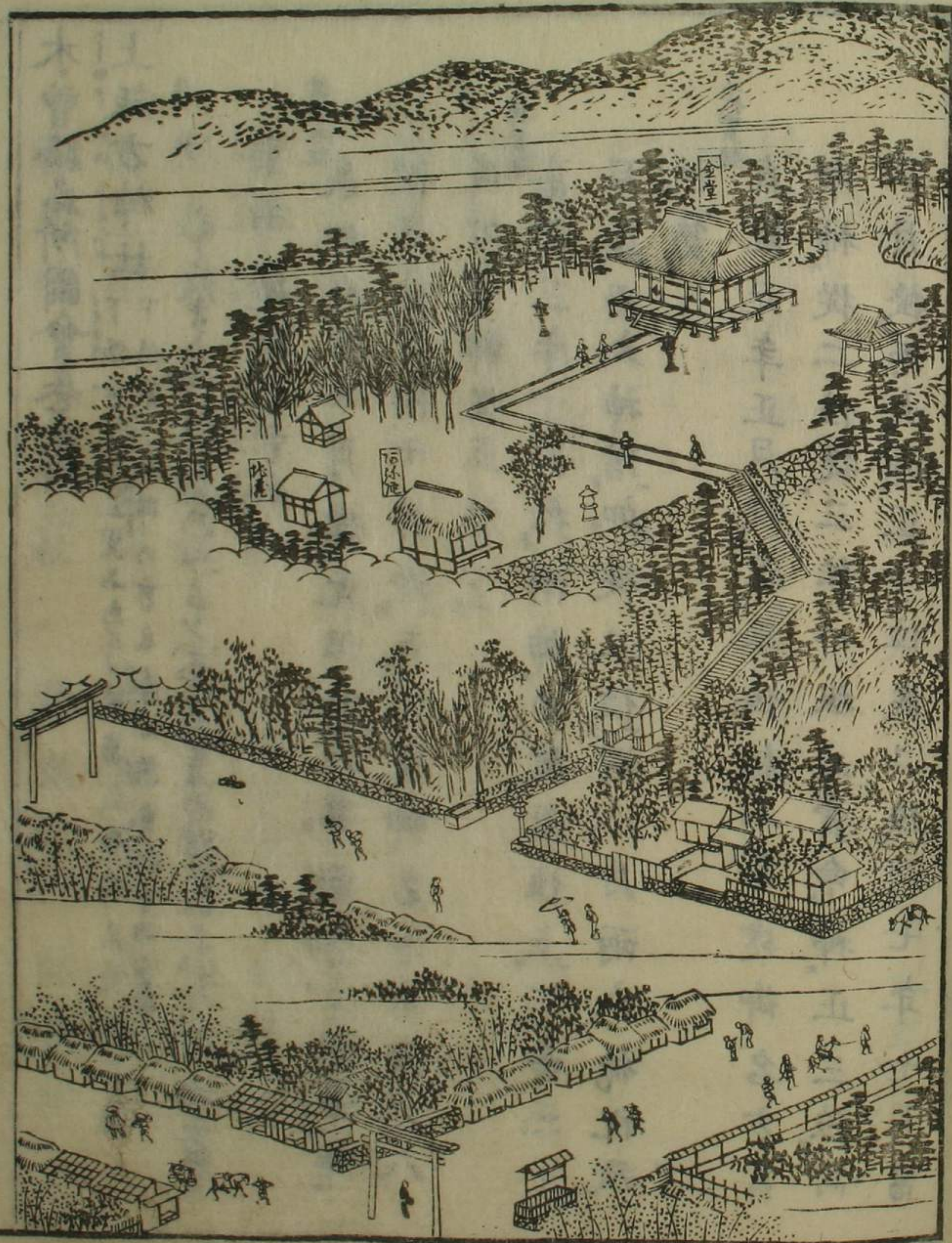
本<sup>ほん</sup> 号<sup>ごう</sup> 四<sup>よ</sup> 目<sup>め</sup> 二<sup>に</sup>





木乃四ノ一







木曾路名所圖會卷之四

上諏方神社 下後方より三里あり延喜式名神大月次二座

新葉 あはれなる瀬波の糸乃みるる之志を育む神のちるひ 宗良親王

祭神 健御名方命

續日本紀

美和九年四月授无位勲八等南方刀美命神

文德實錄

坂刀賣神從五位下

嘉祥三年十月授兩神並從五位上仁壽元十

月進兩大神階加從三位同八月兩大神祝預

三代實錄

把笏 貞觀元年正月授正三位勲八等建御名方富

命神從二位從三位八坂刀賣命神正三位同

二月授兩大神正二位從二位同七年七月當

郡水田三段為南方刀美神社田同九年三月

進兩神階加從一位正二位云云

拜殿 南向美濃神所

御供所 殿の東

文庫 石の御

祈禱所 石の御

繪馬殿 殿の東

護摩堂 殿の東

三十九間廊下及三十九所の末社あり

所政大明神

前宮社 砥並社 若御子社 柏手社

楠井社 大歳社 荒玉社 千野河社

溝上社 瀬大社 玉尾社 穗護社

藤島社 内御玉社 鷄冠社 酢藏社



習焼社	御座石	御飯穀	相奉社
若宮社	大西御庵	山御庵	御佐久田
關庵	八劔社	小坂禎守	鷺宮明神
萩宮明神	達屋明神	酒室明神	下馬明神
御室明神	御賀摩明神	磁蓋山神	義倉會美酒
神殿中部屋	長廊社	以上一棟廊下之側は鎮座	
大福殿	廊下の入口		
御柱	廊下の内		
大黒天社	奉社の外より		
勅使殿	其外未社二番		
六角井	社内東方		
神樂殿	日東の方		
御手洗井	六角井より		

**金堂** 神宮の西の山より小あり  
 奉り釈迦普賢文殊と安ん  
**五重塔** 金堂の傍にあり  
 此塔も奉安ん  
**鐘堂** 鐘の傍にあり  
 弘法永仁二年とあり  
**釋迦堂** 弘法永仁二年とあり  
**大昨堂** 弘法永仁二年とあり  
**神宮寺** 真言宗  
 中興版田統承入及再興  
**尚社と科井の園一の宮** して特小上誦方と神領廣くして  
 社美藤なり例祭と年中七十五夜あり其中小毎茶三月園見  
 三つあり中と用也二つあり初を用也麻の頭と七十五組子の神系  
 小供と又別は麻の肉が料理してその社人も其麻の肉を食ん他人  
 麻肉は小獸を喰んとすの所は神小形して社人より著を定て喰ん  
 據形して其の上下は小七奉に一度申奉御柱と申大系  
 あり遠近四方より詣人多く集ると其祭式者なりり爰小古茶



より申傳ふ七不思儀申す事あり新羅御波八榮鈴御作回  
 浮橋根入杖御射山湯に清濁等あり清波と云信濃と日本  
 水よりて才二日若爲る日四日の頂上の流方より下此流方  
 方小横幅五尺をりたる本名をの通するや氷の上におとす  
 思ゆるに種別年必あり奇怪の事これ清波と云又神元と云  
 下は清波のよりて後人より清波の内に清波の流るより  
 上より清波のより上流方よりなる事ハ此より下流方の方  
 清波ある所を此より其前よりて年の豊凶成否と云清波  
 一文字小字に成るゆがひ事あり

和回山路五里八町流方の駅一千町并もあり古人多く旅舎  
 小出女あり夏牧あり少あれどもさげ宮作して寒烈し

北の坂の下に小瀧屋あり

毎歲正月朔日不違ひまふ

信濃  
 下流方

祭神上流方と同神

子安社

護摩堂

若宮

伊勢両宮

藤原

富殿

流方秋宮

空社

舊事紀

天孫降臨時。大己貴神第二之子。健御名方命。欲拒天孫。於是經津主神遣岐神逐之。健御名乃命逃到信濃國。諏訪郡。迫甚而請曰。願得此郡。以爲父母之讓。不爲天神之怒。而作吾居。則吾豈奉背天孫哉。因茲經津主神以諏訪一郡附于健御名乃命。是即諏方明神也。大物主神子健御名乃美神者。事代主之弟也。今諏方明神是也。一云神功皇后征三韓時。天照大神託以住吉明神。諏方明神令爲輔佐。

神皇正統記



諏方湖

下諏方

神宮寺

高鴻城

諏方の湖

こらね水

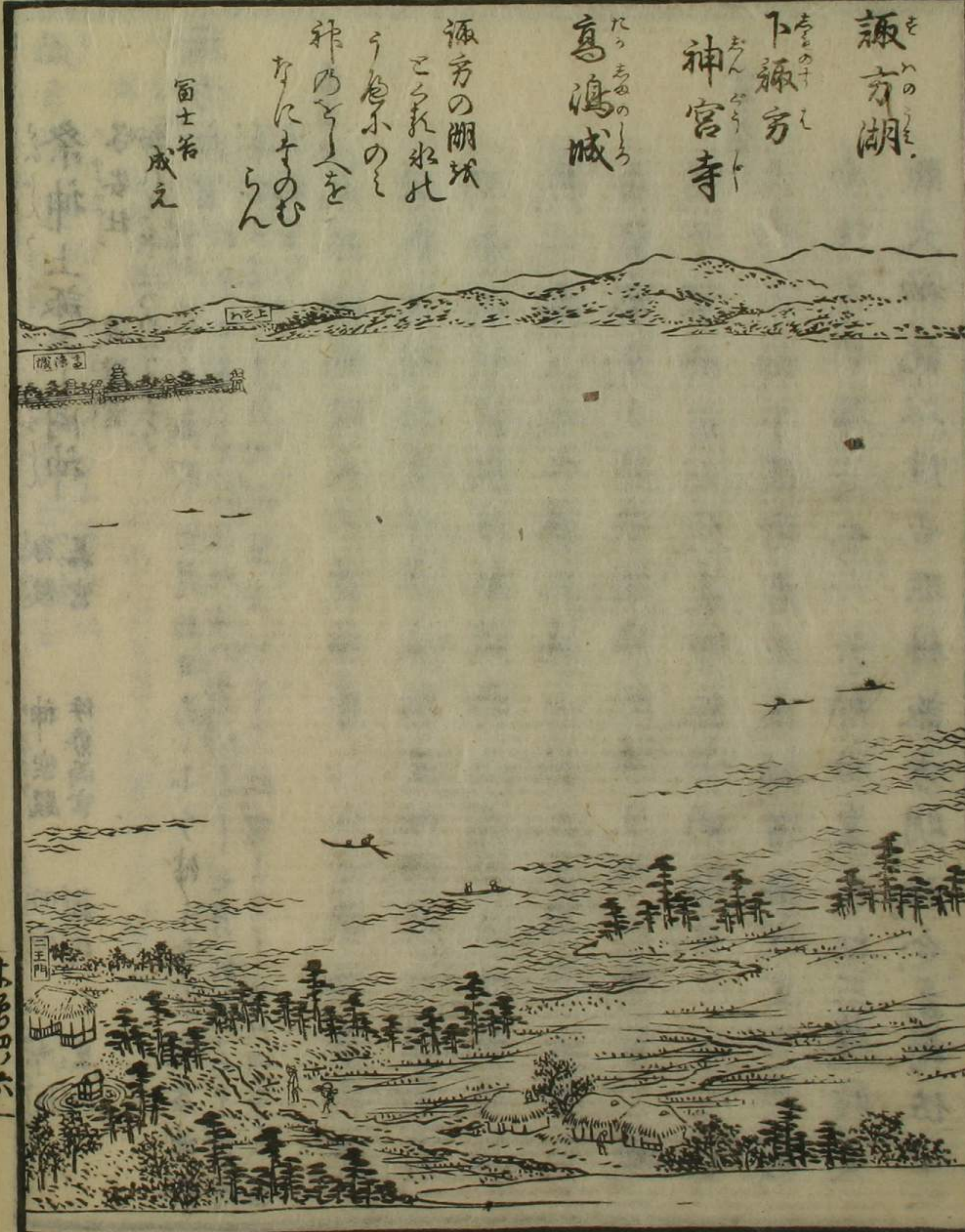
うね水

神乃と人を

なれすのむ

らん

富士若成え



本巻四六

下

さらの海や

水乃知りに

乾りくさ

空井小

うね

雲井

うね

八幡美濟





又云信濃諏方下野宇都宮專狩獵供鳥獸

名也一極下の諏方の此街道の駅也て益舎多く紅甲一海京  
辨ふるうれ女たちほぐひさあらんせくや神ひさ被取らりて  
棧ひれ人乃足とてむ所の中に温泉ありてけ宿の女ありて  
浴屋の口飛くは活きせる其介と後つのも人多く新井北館舎  
須波乃湖 周十一里餘直三里許裡新龜甲あり今も水活て  
いみよ及ぶるその疾去そのは湖面風ひらひてより氷積らん

おろし

塩川院後百首

壬二集

拾玉

山家集

ま本

まへの湖水北極のまの結乃波とてさるかまなり 歌仲  
そままの水のうも玉珠のすは波のあまはまはし 家隆  
極乃波をまをくつる嵐は波を氷にうははあめ 益法  
ままのまのまの波も有越つるを流まのけははらり 西川  
まへの湖をれ里の結くや氷取まて世を渡らん 為家

本巻四十七

日

まのりもや極乃の湖水ま分て尾とある約のたまむ後 親隆  
け湖ままのりて流れとて後七尋をうり所を先づり小浦くありて  
民家衆一四方ぬいふくありて凡色斜るは漁父ありて有  
て魚鱗取まらるる半ま一漁舟乃外水小葉とて林をたの  
湖そのひらりまよつる氷をるるその尺寸も透間なく湖一面水  
ぬさるる幸れ寒温ふよとて霜月のうらあはむ作をれ初り  
氷をるる後人まよを通れまを幸はるるて二月の末二月半  
中で水のうをゆきくは氷の厚さ半あり八九寸一尺許守あり其  
上は何程乃大本大石をまもくも破る幸なり一幾千人つらて毛  
くは氷のうをまふたは橋をまもく通る其ま雪積まはま中  
めくめんまをまをるんらんら州履もてり馬まをるる酒  
日本國中に湖ま一也之れも川のめく氷を所ある一信濃  
日本もく地高くして雪氣活れまなる極くは湖水もて漁人



武田勝頼ハ  
 我勇威を  
 自負して  
 神佛とぞ故  
 せんを遠  
 赴き歩ひし時  
 忽ち板橋崩れ  
 危れ幸多し  
 赤穂浪士の神乃  
 出ふりし時  
 津トノ



本巻四八



水の下に網を引を水引せり又奇異の業有り水引所長く  
らめて其筋より網を入す其先ぬら行乃竿を持此岸ら  
す所より次のらめたる所をみみを送るて幾所もわく乃  
おしく小うめらして網を引るくして魚とさかひしめこれおしく  
さる幸と知れりてを喜と漁人とさかひしめとさく又水とさくら  
漁をふる腰は長足竿は短む若あやうて首入ふも竿あく  
死とせぬるやせり或は沈没の人あまの番は家鷄と今水の上と  
り小鷄なく不として屋を構とす

高鴻城 下の所方よりモ里小あり 高鴻城 守及居城く三方石味  
繩子又所より有り左右と所より 高鴻城 守及居城く三方石味  
出入泊由方を出味と山幸助助晴幸繩張とす  
衣裳 富士山の靴は下とす  
夫木 傾波のらみと種とがみさるめはるす日とす  
すの海衣は勝れとそれれい富士のうくもはるはるす

諏訪温泉 下河原 幸陣の傍より中を流る高貴ありい男女  
を別川村本の難人治上り高貴ありい男女

富士山 眺を 下河原 幸陣の傍より中を流る高貴ありい男女  
を別川村本の難人治上り高貴ありい男女

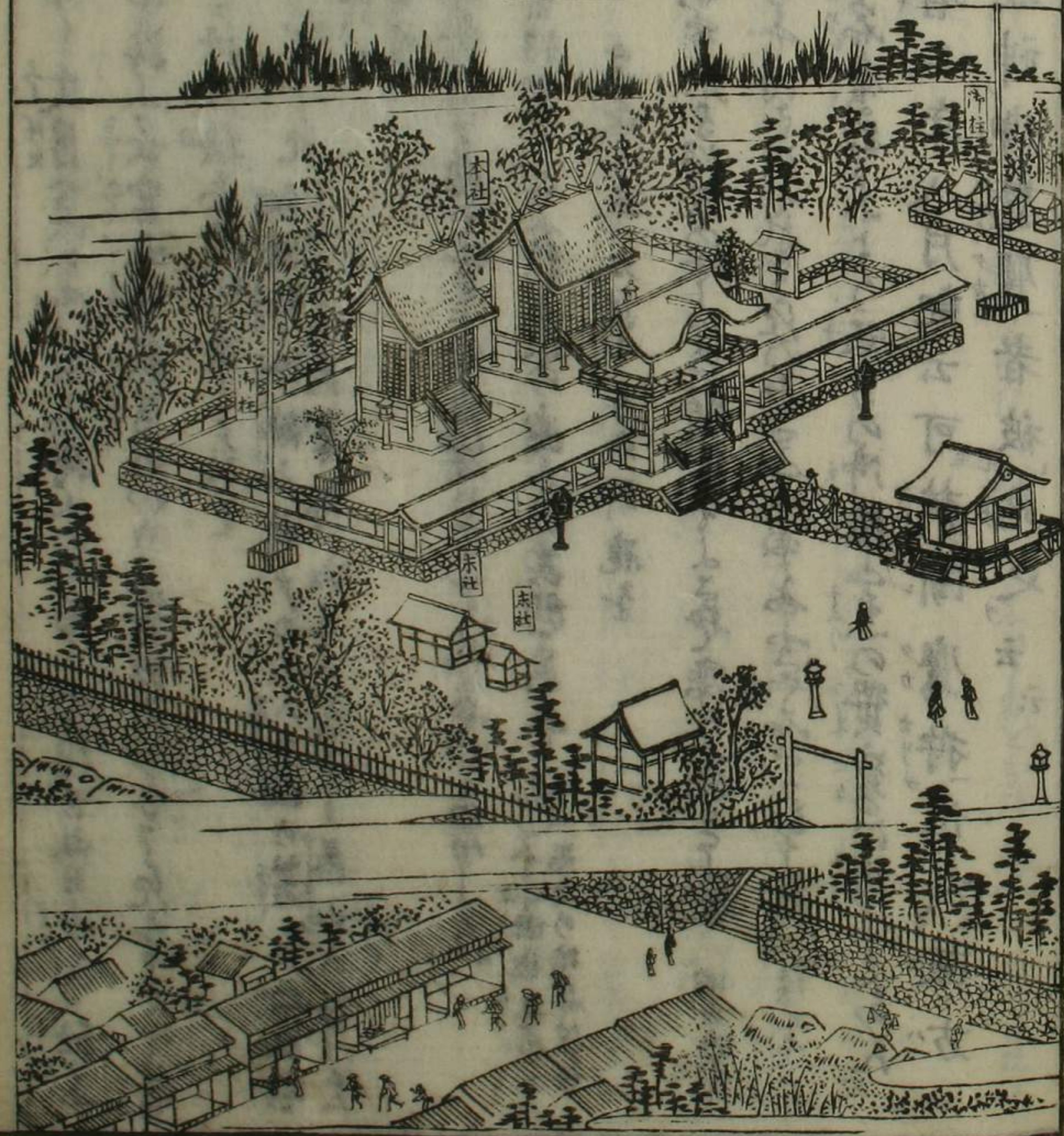
天龍川 水源 下河原 幸陣の傍より中を流る高貴ありい男女  
を別川村本の難人治上り高貴ありい男女

御射山 射と矢の標旗なり  
玉葉 ところろく種をれめろの二ひふさく甲なる塔のみと山  
金刺置又

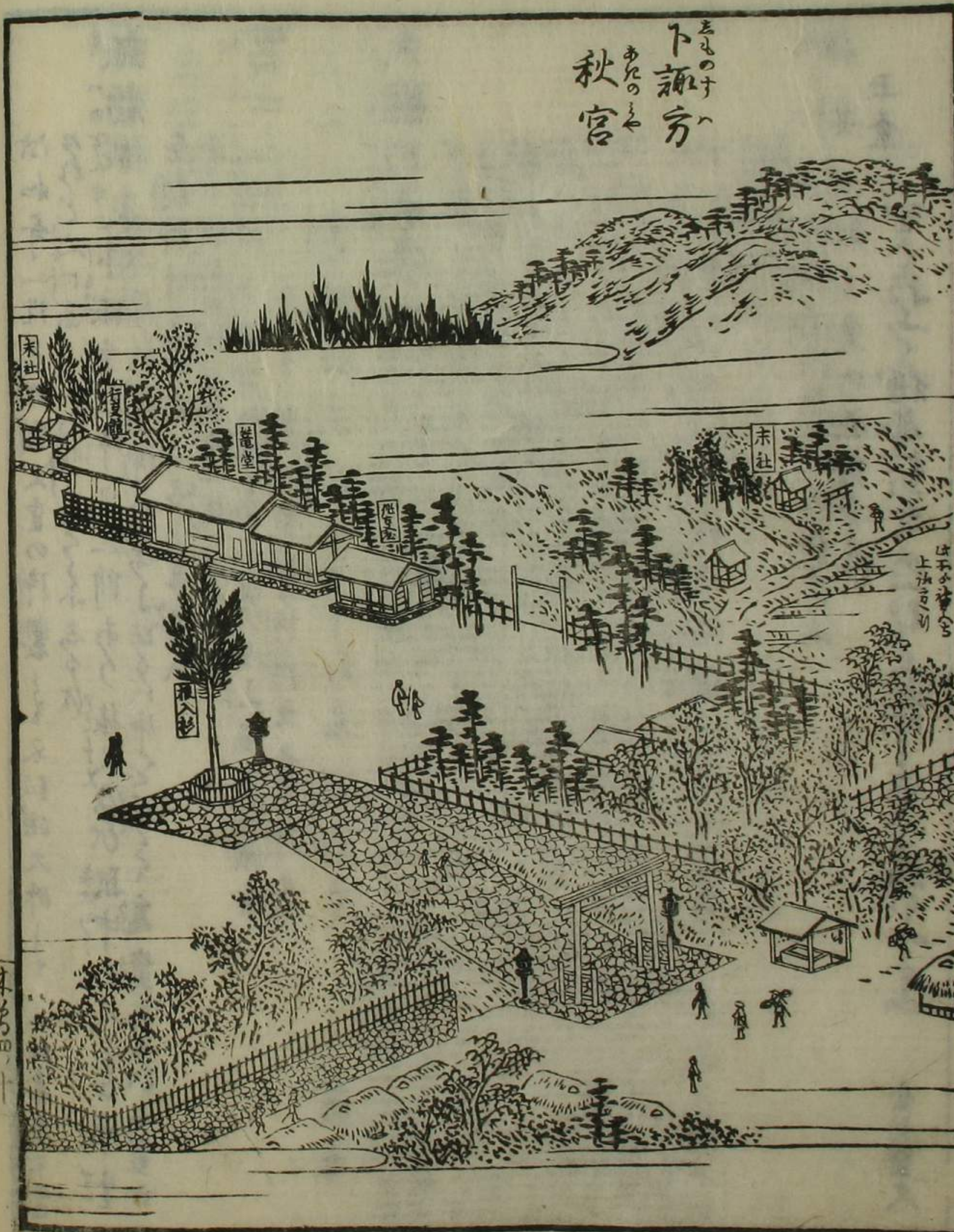


道遠院

後題  
宮程  
芳々  
君々  
天乃  
岩



下諏方  
秋宮

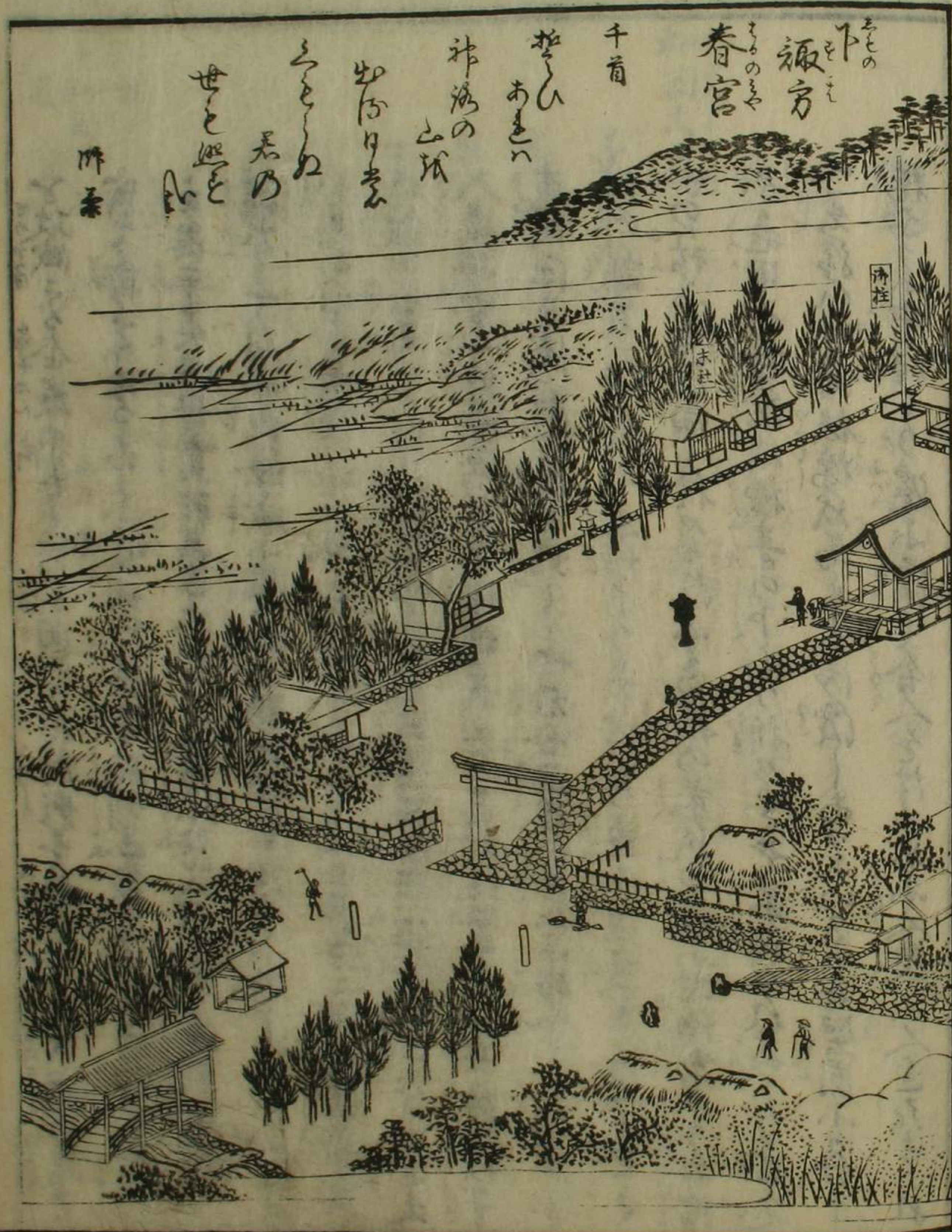


本為四









木乃四十二



と攻滅する企圖なきは武田の臣臣勝頼を誅め常に其備の怠り  
故に責むるもあらず武田の幕下三州の家三方の内能子の城  
主奥平英徳守貞能其子九郎信昌去月八月上を遠列候松平  
頼朝とて同は長篠城小指籠る勝頼は幸故に不怒り候ひ意に  
出馬ありて長篠城と攻め取らばやとて天正三年五月中旬甲辰  
の銘と出馬せしが武田の臣臣勝頼を誅め常に其備の怠り  
入道梅雪一條在場のを支信龍武田左馬助信豊武田兵庫助信重  
直田源左衛門尉信綱を始とて初合其勢一帯を分人をして圍之  
使川頼方大明神小斎清ありて種より進退せし下とて  
かの社小馬坂向て種より種より高尾の茶屋に於て信玄よりお傳  
ふ飛甲の持陰梅極書の下より折るを不測され其より遠  
へ是後ひる耐板橋成馬もく涉渡りありつて水も堅固ふり  
橋あり中程より遠く落て舎人をけり小人衆三人と死せり

本巻四十三

津島逸物とて小勝頼馬上の遠者もて使川頼方を誅め常に其備の怠り  
すより津身小斎もすより種より種より高尾の茶屋に於て信玄よりお傳  
ふ飛甲の持陰梅極書の下より折るを不測され其より遠  
へ是後ひる耐板橋成馬もく涉渡りありつて水も堅固ふり  
橋あり中程より遠く落て舎人をけり小人衆三人と死せり

和国大嶺

義盛の城跡ありて是より廿二所ありて高尾屋敷に於て種より  
又廿二所と種と和国作ありては城跡の跡もいふ空快なる所と云ふは  
見ゆる高尾屋敷一東坂屋敷とて三月の末まで雪ありて是より地盤甚ど  
高尾屋敷の嶺より種より種より高尾屋敷の茶屋ありて種より  
上和国を三里六町之けし中名茶屋一不謂九輪茶下毛虎尾州  
約種茶は湯花なぞうはるは茶花見ぬ

芳り一蹄馬をちりや和国作

上和国

長久保中や武里之駈の部が八幡の角一海あり和国義盛の  
雲狐集るとして省の出は又おひ川橋あり和国が系とすはる

華 骨



長谷の南ふ大門村大門村あり街道より遙かんとあり下田を之場  
にして常屋あり深き山村青原これなり小孫那形り依田川下大橋小  
橋十間許あり南北深き水田あり下田東に大門嶺ありあり  
大門嶺 又大門村の南ふありむら 武田信玄を信州へ送  
大門嶺合戦云々

小笠原長時村上義清両家の軍勢一萬三千餘人大門嶺へ押きたる  
武田家の軍勢も亦一萬餘人あり其時信玄小笠原内膳正秋山  
十年を備え人をその物見に御付し其後二人おはせしむるが  
相討りしにけり小笠原村上西膳正の御付し其勢一萬餘人と相  
見たり然も後小備一萬餘人軍とせしむる懸り信玄我々の信玄  
左ありは信方の備を僅せとて八ヶ嶽の麓甲州通扼が原に陣を捕り  
信勢の内足輕隊將様田備中守日子息長十年月利がより加川一乃  
先小備は二の身は甘利よりありは多田信房嫡子新我三行ら父子  
板垣小加賀より二の備の先子より安間三衛尉と飯坂孫助加川と

二の先子小備は虎昌後と之堅む幸陣の備と士大将原加賀守昌後  
右備と原英渡守虎胤小懐山守虎盛左陣に市川赤女二子二女  
原と左邊の月と右邊の備と武者奉以加藤駿河守昌頼多田治希  
在馬市川入道梅印あり御る處本信及勢大門嶺に打ち越り村上表の  
先子布下平治入道知十軒其外宗徒の者は何れも奇心の列と  
懸合の汝と相討り知十軒の備は進先横田備中守日子先小押  
の表西陣関を令く砲弓此迫合と始り孫の穂先を拵へて互に場と  
せり争ひたる平治入道は武田の者力をたれ自給は退きて士率と下  
知一真先小突ての甲列勢平治入道が働小けらる一冊引  
退くは種を安くは思ひて二の先子其利押ありし勝りしに信州  
勢と備より之分後小知十軒がけり作の方へ引れを武田所退き  
備は乱れ引退く次小笠原長時の先子勝野山多田治治守也  
かけ合せり入札は我ひり小笠原勢一我本我ひすけ大勢討ま







信列一万の先鋒兩度共ふら負一は之將義清大將也我旗幸  
とて之を誘敗を一我母安せん也競ひかひと押さふ安間が勢信  
兩方互小給瓜入と必死と戦ふり信列勢の多勢とて大將義清  
一我母欲と突處とんと競ひかひと進む安間が勢我ひまけく  
四度路に散れとす所引返く二の身も備へ飯家多勢士率  
勇て村上勢も突かれ大將小笠原右馬助長時未牌を取て其  
が勢も馳合せ追ひ返り其時旗本の茶も備ふる原加多  
昌後援給ふ突かんと妻の方へ備を押し入れ大將時信自  
乘牌を多く旗本とりつたの方へ押さへ原加多守を備へ左右  
より敵軍中にて援給ふと突かると巴の字も白り井の字も敵軍  
突給ふりとの信列勢時信昌後兩備の援給ふ散走して之れ也  
散れと散れを先子の二備を礼して追返を限る小印を揚げ其首と  
おさふに帳面一千七百廿二級あり味方合戦處に者疵を惹く者

信濃 長瀨

雜兵合々く三百は格三人たり也子孫麻中を考られらる軍記あり  
蘆田まで一里半は驛の民居三回所を有お對しと巷と

石荒坂

は所より吾老もまた十五里  
上の強勢七里は同坂道あり

石割坂

は坂より遠く妙義山あり  
この及懸し

信濃 蘆田

至月まで一里八町芦田何某が城跡ありは駒小服茶と賣  
海野平と信玄と謙信とは所母と合戦あり又根津村は根津

海野平合戦

甚き傷が居る所あり  
十月十九日海野平に戦ふとて則ち地母押出する時信山  
晴幸小幡虎盛原虎胤は三人を召れ果荒若大將とても頂羽  
城も欺く勇將とてを義清頼も今日合戦と必定十九死  
生るるなりと戦ふ事軍之海野平之物見より能見様あり  
中宮三人則ち向ひて敵の援隊を下雲し馳向て山幸助助申





大門邑  
若宮八幡

乃の敵の備速なる申小濁と申すの如く合戦を持て持たぬ  
 尚家との取合形は甚備の儀法最きとせやる原小儀がやる  
 款成程合戦を持て備暮る相見の人数六千の内分とせやる  
 斯く二人又誰をも考をたし歩むせ催りて申し勝儀汝等二人の  
 外おこの何は強りきとんとて山幸と迫対られ備の高儀ある勝味方  
 備の立格を悉く演台して宗虎の少勇将ゆをせよ味方一万五千  
 解務今日午刻にて兎角して時刻を極し催りて方の吉刻小  
 若丸別隊の大將共味方勝べきと存せりて殺せざるに術とせは  
 敵は決す本弱は味方より未の徳利と存せしは汝が中一  
 中より所ある儀を立寄りて陣を精翼本定らる所先を  
 右の方へ小山田備中守信別先方の相本市彦尉屋月甚八芦田  
 下井高友駐平尾忠尾耳取依路平原左と郡内的小山田左彦尉  
 信長先方共長彦左彦尉小若甚八松尾五郎左彦尉和回福沢内



村あり中北先より栗原左衛門尉昌信良先方より須田清房守室  
賀綿内井上より旗本の花備と真田弾正忠幸隆九子屋沢これと  
旗本と一多形り旗本の右方五町許隔り飯家兵部少輔虎昌是  
と降参り小備より旗本北後備ハ馬場民部少輔宗政内蔵修政昌豊  
日向大和守昌時勝沼入道穴山伊豆守信良武田典厩信繁此六頭  
坂を以て幸陣の後より弓子の方へ馬のり小備より原加賀守昌隆と  
九十騎と從り引下りて跡備軍をさするる越後勢と龍の丸備軍と  
て栗原自身旗本坂をさするる晴信の旗本に合せんとせしむるは  
掛りともども飯家虎昌馬上歩武者凡そ一千五百人栗原の奇術  
坂を以て旗本の右小備を立堅先例の志備軍で馬具具旗指おえ  
渡りてさするるを猛勇の栗原案より相違の言さかり形て十九日  
の午刻小山田備中守越後勢の先陣長尾正系が子也互小栗合々  
銃炮を打遠る程さすあまもも小塗を提々突々入るるは先登也

攻取小越後勢旗本ひく二町許隔り引次小栗江口城守柳清和守水  
身安田上総守甲州の左子小山田左衛尉と旗本一ヶ小山田既也  
負々武所許引退く是を見と栗原左衛尉傳はく故と援也引  
合て急の志鼓を打せて甘槽辺のさするる備軍突々かす討ち栗原の旗  
本より揚貝吹立をさするる大將栗原自身守佐神後河も度勝法連て  
只武孫先子一馳り来牌をさするる子好く勢を引あせり武田方也  
我事小山田助助之將の法也よを敵と魚鱗も備くさする一我と  
相見之也味方の陣は堅固也て然んとする小虚をたがふ栗  
原殿いとあつて引次中よりせんとする士率長退はさる中より  
御下知事むも作せやられむ晴信即百足の指物十数人といふ小山田  
栗原が備軍獨りせられるる追及を越々敵と追ひ作すのたふ小栗料  
再引さするる条制法より円場より追及を越々たするるを告する  
らぬはさするる結勢は栗原好く中より軍兵好先なる今日午刻







後撰

後拾遺

元元

千載

新古今

類題

六帖

かつらむむをもちて種を映持のよりゆ月をとりけり

源重光

おてしや映持の月を見敷くもほじかてふあつりと

未深唐門

思ひても形して我身をみまき映持の月をとりけり

律昨秋香

つれも月をわけてつるまをけりてんさるるの心

隆源法師

はらもあや映持の月を射るのほたきものかたふけり

伴勢

てる月をとりておるそく文級やあやの寺も好まはる

後柏原院

映持の月を射りてつるまをけりてんさるるの心

漢人志士

おのけや映持の月をとりけり月乃友

たせ瓜

名の月や田毎乃玉を風清

藤 尚

眼をとりてんさるるの心

菖 骨

つれを更級映持の月を射るのほたきものかたふけり

社あり式月大 今八幡村ふり社領式百石又冠嶽の麓にたふる

巖石ありつれを映持の月を射るのほたきものかたふけり

殿とて二間庫裏半 巳午に向ふ幸尊とて親善院長樂寺や

号は面を棚田の上小降を神田年八畝とて兼く神供をまじ中始

揃とて水取中とて田毎月を射るのほたきものかたふけり

とれ西水にゆく千隈河巳午とてあはれ良小降の月満く浪地中

踊ふ小降とて左八幡の社あり川と降く向ふとてこの地あり武

水別の神降とてあはれ一の店とて宮寺の子院とて長秋の宮を

印はつとてねと人里遠くしてあはれ源一好乃とて月をとりけり

今より百年とてあはれいひりれ雲水清けりあはれ湯とていひり

屋あはれけ地志とて月のをとりてあはれ三すりて映持の心

入相の清とてあはれ物あり中とてねと白波緑林のたぐひ波を

あはれとての頭陀とて住持めり幸とて我はあはれとて南とて冠山此あはれ更

級川田毎の月映石其傍小桂樹庭石小袋石室とて地とて境是山

育明山とて一石山南とて雲井橋ありて十二景はつひあり

あはれとてあはれ











望月

八幡中を二指或所まねりる昔光寺又十五里

望月城址 尚宿のまね山の上あり

大伴神社 今津 社と稱はは五生を祀る

望月山城光院 日 釈母あり

奉尊阿弥陀三尊佛 岡基望月遠の寺法名滅光院殿東山

望月石門内母 堯石あり

望月御牧 今牧乃系より

拾遺 逢坂の關北清水は新とていつや奪らん望月老駒

波拾 あり坂北松のむくま引程のゆかりに足あがりらほたの駒

金系 東海流を伝ふ駒を望月の駒とすいふは河よりさる此雲

新古 され山子代古道のりて又露のりかそら月乃駒

新千 むくろを舟のりて流せ面けらるる望月乃駒

後拾 年瓜なる雲の上と見えし秋の朝をさひきき望月の駒

拾遺 望月の駒より運くはほたの駒とすきき中とすくぬか

後拾遺 望月の駒ひくるとはあふ坂の本れ下をさきき七有

望月の駒ひくるとはあふ坂の本れ下をさきき七有

望馬を慶覧し給ふは貞観七年十二月小制む信濃國牧馬元八

月廿九日吉徳成貢く今十五日申定むと云はる駒を望月の駒有

望月の駒七郷中てけ進進みか津牧ありしやう望月の駒を性

望月の駒の神乃嬢ひのよし望月の駒を望月の駒とす

馬城並に信所より来たてそ一板城ゆらさるる也

延喜馬寮式牧 信濃國

山鹿牧 諏方郡 塩原牧 日 岡屋牧 日 宮處牧 日

殖原牧 筑上郡 大野牧 伊奈郡 平井互牧 筑上郡 笠原牧 伊奈郡

高位牧 高井郡 新治牧 佐久郡 大室牧 高井郡 猪鹿牧 佐久郡



萩倉牧 佐久郡 塩野牧 日 長倉牧 日 望月牧 日

角摩川 角摩川 角摩川 角摩川 角摩川 角摩川 角摩川 角摩川 角摩川 角摩川

瓜生坂 布引山の道あり

八幡 塩田中を以て十七町、秋の中に

六十六経塚 田原村ありむろし、塩田上人と云ふ、日辛六十、六ヶ田

筑摩川 大河なり、流れ二ツ支、枝分りて千隈川、或は千曲川と云ふ

水源を佐久郡金峯山の陰にあり、水は清く、小鵜と浮く、水は清く

死す、三ツ峠より出る梓川あり、水は清く、今も佐久小俣の郡

を流る、河の中流に都の境を流る、水は清く、犀川と名づ、嶽山あり

筑摩安曇、更級水内、界流、経て筑摩川、水は清く、合流して、水は清く

万葉 信濃系流、知具麻能、河伯能、左射禮、思母伎、彌之

布美氏、婆多麻等、比呂波、牟 ちく海川、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く

新後古 君代、ちく海川の川乃、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く

雲玉 名の、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く

扶桑略記云 仁和三年七月三十日、信濃國大山、類崩山、河溢流

六郡城墟、拂地、漂流、云、六郡あり、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く

金峯山の山陰、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く

ほそそ、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く、水は清く



川中嶋 山幸勳功記

上杉入道謙信ハ川中嶋に合戦小是時時成交せんて武田の兵兵  
備あれど十分すみてあしわが兵味方の先鋒とありて  
持味が備へれ入る後信今ハ何れも是合とき信受二母三母信玄の  
旗平かけ入り母を一時小使とて中後陣の甘糟直の母小使分  
軍の強固とて一や中波一みづら旗中備一子母の兵を率一先  
陣をうけ抜接する母強通く信玄の床机乃儀法目つけ突くを武  
田方の中備とあされし御先母飯屋が備と其穴穴に備せ  
信玄の旗平や只三備とる場とを原してあまなる信信三母の動  
手に還兵を率一育受て存亡孤氣人と勇軍日信百倍して突  
入る小旗中の花備母あまの旗を月三母長坂約宗跡跡之助助  
之向く防とあま上杉勢勇壮めて多勢をい幸とせん

探立ちるあま月長坂跡跡の二將其勢母敵一がて突立しれ  
散れせし信小信信三母三尺六寸の大方ぬれ信一騎信玄母  
床几備母強か信信母三母三母迎智等に命とて御せし信信  
一母の勇と振られぬ武田の兵士あまの行進何れも手首て倒れ  
信小信玄も今ハ助る者けき速小返れぬと信玄の言も交法  
去て六越後軍と敵救幸武功も水の泡とて信信とてあまを  
登り床几母か中助とて母とて信信とてあまを切せき  
形なく信玄の床几小迎討只一討と思われ一母と信玄の信玄二人  
中を我の有る謙信と信速とて信信とて信信とて信信とて信信  
其後相を考へて信見とて信見とて信見とて信見とて信見とて  
切先りの小旗石と輝けと切付とて信信とて信信とて信信とて  
刀を抜き信信とて信信とて信信とて信信とて信信とて信信とて  
信信とて信信とて信信とて信信とて信信とて信信とて信信とて



後信小打町を主人をまわす我々小道の後小打町は日ト出之の  
 新武者出多りて声張りけ後信をすくむと振奮すその或る一  
 智深の綱目噂い入られ道々幸あたまド匹夫の身小打らんり  
 伝云みけ其首級秘宝一也噂りなる我々後信すくむにむす  
 り小打道々其の信云あるや也噂り日ト出之の業ももはれけら  
 死く其申中は伝云ある人幸必定くと思ひまけはある三人を討ん  
 と火水よりけ物より山平助助入道の先手小加り敵の先陣と  
 代為一之將後信不違人と尋求一也も双方軍中威之知り  
 一後小味方の強中んをせ形一と雨く返り處に敵將後信は  
 けりめらと床几備を崩し伝云みけくさるわわわ一若るその育る  
 西井山本道鬼をい大半七也まふ馬小鞭をさる雷電よんを速  
 早く飛走や否や陰瓜守子けく無二無三小後信目け突めくふ  
 其陰先をると好むと一との後信交りて何れなる我々我々いん

筑摩川

あつた

家おゆ

ふるぬ河

花さく桃ま

うけゆして

三州吉田  
義方





坊とわん事 奇懐くせつりつ種を我を也山中助助晴幸入道がわせ  
名宗なる小徳信叔と毎双の曲者返返の老一遠信去小安合形が  
は信運人を強念よりせとこれいかに信く味方を母りいふあて  
空しく付れも無血方り一旦退死味方の兵と走母あくと見候  
中本城より控へ馬返されざるを助助入道幸中に入る將将りか  
迹をたてて飛ぶとく小退りけり後信の宗馬と放生月毛と号を  
内々雙の強足るればいふかを芳尚幸あく騎人も名譽の達者成  
左助助入道と種くせつりつ種を我を也山中助助晴幸入道がわせ  
陣中本城へ入るとせし種を我を也山中助助晴幸入道がわせ  
かりや頻小馬を打ち死に其間立るもろりいふかを芳尚幸あく  
たふ強を打ちさる小退りて種くせつりつ種を我を也山中助助晴幸入道がわせ  
ゆふ突當りうさるは遠物されは強傷あがり形もも獅子は市連  
をいふとく大木れさく原川のる様助ふりけり其早に幸烈風の

おとくさるは遠物されは強傷あがり形もも獅子は市連  
白服をさるけり熱功記あり  
八樓の駅をさる今世継村下原村みまをせの左に瓜屋くらを川  
みいなるは母の経違ぬる山河を差小身するううはく小見はる  
きのふとやいそんまふとやいそんまふとやいそんまふとやいそんまふ  
今とむりや毎とくは我のわり古今を隔りふまの我の我の我の  
されよとやいあふふのさるあうりよは所をさるは昨日又いづまは  
所あて今とさるのよとん強よとぬるのの年月とさるさるさる  
うはうぬあと思ふくたどりり小徳信といふ小徳信といふ  
岩村田中を一里中野内三所許お對して巷とたけん解き  
散在入は小徳明神あり是れ入あつとさるあり  
駒形明神社 駒形飯の思ふなり  
因云ひりこれ牧馬治神とて中なる溪間山の舞臺なる石坪也といふ

信濃  
信濃

駒形明神社

因云ひりこれ牧馬治神とて中なる溪間山の舞臺なる石坪也といふ



石塔の里ありて其氏何果と云者之縁の年以約の石ありて其  
 見し幸ひと云て其石塔ありて其石塔ありて其石塔ありて其  
 石塔ありて其石塔ありて其石塔ありて其石塔ありて其石塔ありて其  
 石塔ありて其石塔ありて其石塔ありて其石塔ありて其石塔ありて其

佐久郡相本村  
 新田



高サ三尺四五寸許  
 後の方、長く其不取たり、石之真石駒も同色也  
 駒の形の内と式三分程なり

今之社を建て駒形明神と崇奉せり  
 け駒形と云く下塚原上塚原と街道より小井あり種々塚む  
 と城く平塚原村より

相生松 平塚村あり

岩村田

小田井中一里七町 駅内の町五六町あり 相對し  
 巷派あり其好敷在凡長光寺へ別道あり又小諸中  
 道二里あり又甲列池乃道傍あり南駅を内藤吳徳及  
 の領地くも人多し

小田井

恒吉祠 小田井中一里七町あり  
 かのいづ原 芝小幡跡此縁あり右ふゆ神の杜有  
 道分中一里十町 駅内式町あり多し 農家ありて  
 旅舎あり宿懸し 東の出口本業所堂あり 道分此跡  
 家あり  
 け驛乃中井海向りて流傳し用水よりこれを通りあり 町村  
 ありらるる 飯盛ヶ嶽八ツが嶽見ある 二四月の流すて雪あり是より  
 本回系大久保橋瓜渡て道分なるる 坂道ありて道分此跡あり



信濃 追分

菅掛まで一里三町宿より一出女あり

は同宿よりして道口あり

東山道 追分 宿の西端よりありて紙後より紙中加賀越前と行く

北陸道 追分 追分より北へ行く宿より紙後より紙中加賀越前と行く

小諸田中と行く上田(好)と行く小諸より新あり牧野内膳宿後分

あり筑摩川の沿より松平伊賀守侯の居城に紙後より法の本物

来るは國中通りへ魚塩行とも多し中より上田より新も上田乃

奥よりあり又上田より八里半奥より松代と云所あり真田右京左史彦虎

居城に其先丹波藩よりあり筑摩川を以ては信濃川中流より

筑摩川中流より中よりあり河川中流より其邊小横田川あり

むり本居義仲と平家方の城後城を布と合戦あり一節し

東鑑云 壽永元年十月九日越後住人城四郎永用

相繼兄資元 常國 跡欲 奉射源家仍今日木

曾冠者義仲 引率北陸道軍士等於信濃國

筑摩河邊遂合戦及晩永用敗走云

淡間嶽 小田井 追分の宿 井沢 湯

古今 甲よりぬ淡間社より淡間より乙の宿を以て新宿あり

後撰 志る渡なるありは乃た宿を以てあるは義士の種れりあり

千載 宿より紙後より紙中加賀越前と行く

拾遺 川より我意中より紙後より紙中加賀越前と行く

新古 信濃ありありは嶽より種より種よりあり

日 いろく小立やありは宿よりあり

勅勅 志る行く宿より種より種よりあり

續十 志る宿より種より種よりあり

本居義仲

紙中加賀越前

紙後

紙中

紙後

紙中

紙後





浪本  
甚る

千の種  
うね

あなほらも

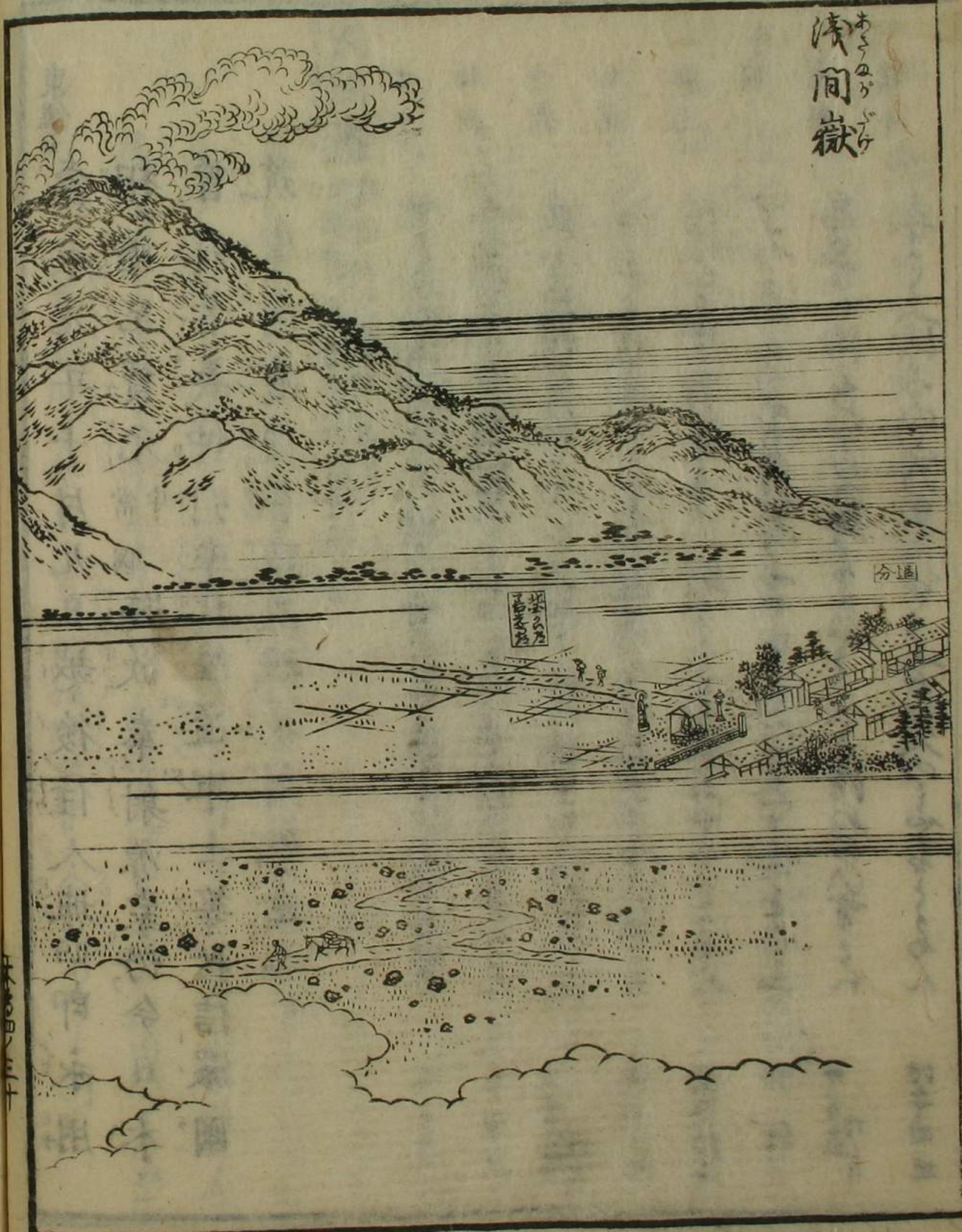
浪るやう

池ぬかし  
定城

ゆのひら

海ノ入

浪間嶽  
あつみり  
がら



分通

浪間嶽

浪間嶽



新撰

丈本

金葉

春の空は淡白のひ小空をくくくする烟をきききく公を  
幾と有り紙て路へをききききききききききききききききき  
つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

後系稿  
抄改

月夜院

源後光

淡回山記

賀茂真淵

淡回山とてくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
平らもと見られきと日れとわわ宇まの山峯に登敷とて  
おれ目もきししおれ目もきししおれ目もきししおれ目もきしし  
無事くもかくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
その飛くわ峰くく雪もくく雪もくく雪もくく雪もくく雪もくく雪も  
背面の峰くくは圓れくくの志ま曳く向伏くくおれ目もきしし  
まへくくトッ原くくけくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
岩群もあへあへくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
飛くく天はくく市日れれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ

淡回山記

そのい是れ此天の清柱たつてよよよよよよよよよよよよよよよよ  
やきあ栗又足一ッあつては宮を高天の系ち本高志くく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
まへくく浪もきききききききききききききききききききききき  
性子を刺あへむくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
の巖手とくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
系全能土もきききききききききききききききききききききき  
もれくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
系乃神也のひよれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれれ  
やゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

淡回山記は極く高き山なりては此の麓乃地高きれ也其基をくく  
見くゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



移りて平野にまでいざ大畧なる本郷を以てその中心を以てし  
本生を一日は中を以て煙をたぬけあり大煙を以て其の里七里の回  
野を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
け焼石道のうらうらに多くあり幸に石より火を以て其の勢を以て  
かゝるに其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
とありありは戸のうらうらに多くあり幸に石より火を以て其の勢を以て  
りよ此山と江戸の方へ迫る英彦尾張は方へ遠く一休勢物語は業平の  
道にのりて其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
書けりやも其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
嶽と能くいふは業平は其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
あり又禁裏より岩まで二里半あり岩中岩屋ありて虚空蔵の石  
佛と云はれ絶頂の大坑より岩小煙を以て其の勢を以て其の勢を以て

付地火災突發一丈石のうらうらに多くあり幸に石より火を以て其の勢を以て  
数百里半由は山介夏月は書き終りて其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
て雲の晨のや一又中林より其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
怪人又此山は其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
の退分より其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
石毛の地と云はれ

信濃 皆掛

諏方社 宿村  
蓼科神社 宿村小あり三代新皇御成二年七月授五位下  
退分の里を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
合を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て其の勢を以て  
とくか宿あり古宿と云はれ皆掛の駅小あり  
皆掛 宿村小あり三代新皇御成二年七月授五位下  
皆掛 宿村小あり三代新皇御成二年七月授五位下  
皆掛 宿村小あり三代新皇御成二年七月授五位下



追分皆掛野井沢の三駅と清間山のゆりこし其麓より麓まで

一里半といふ皆掛を野井沢まで六分半地あり

塩沢 左の方小塩陽の池あり樹がよりのみくは  
下は水あり左の方み見ゆる

皆掛むらびとく甚沢村より坂あり左右皆系なり皆掛村  
なるべく新田むらむれ村たよ敷き山ありけ色と平系原た

の道は左右みね原あり

野井沢 信濃

坂中まで式里八所野井三所をうり左右お射して巷とふん  
其原を山間小敷左にけ所を遠近里とふく皆掛物居り

よして坂人の名付くその形く人  
野井沢を唯日嶺まで廿所をうり東の坂中まで廿里解  
りて坂中法より甚なる一信濃を日本の内より北地なる  
る所と其より海をくして山上ふある園は四方の障あり

本形

信濃本形よりみか登る甲斐飛騨も地形よく信濃よりとくも  
信濃より修く坂中を去の北を雪降して寒く北國と信濃より  
雪降るれと地の修く坂中を去の北を雪降して寒く北國と信濃より  
追分は二宿と清間嶽の腰より地なりと鳥一は三所の間南水  
里より東を式三里を程するうりなる度登之寒れ事甚くて  
み般生せん只裨蓄表のまう一又菓の樹もあり民家あり植

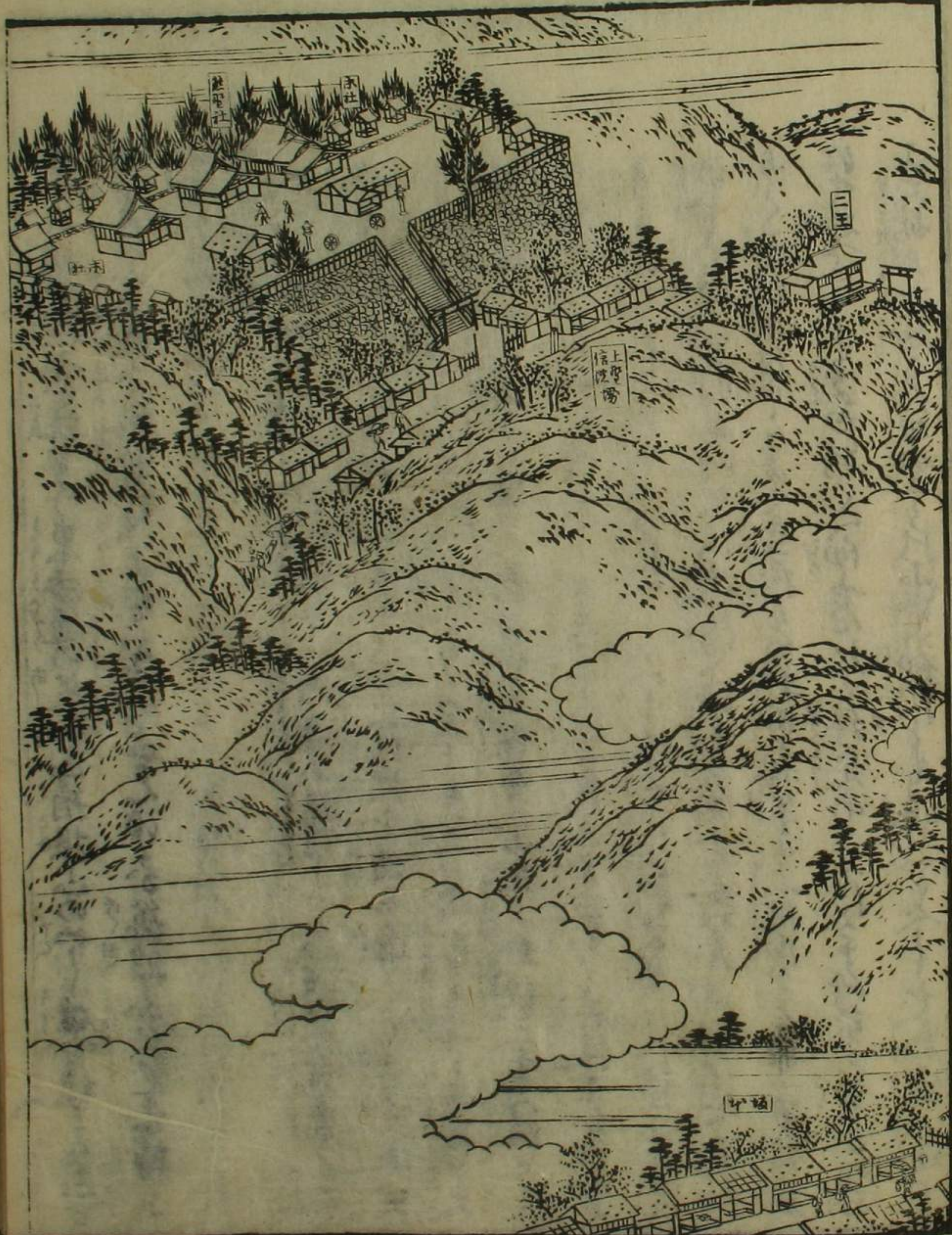
本形

唯日嶺

唯日嶺 野井沢より北二所けり坂の上ふあり民家あり唯日嶺名唯日嶺日本紀  
宇須比坂 宇須比坂 宇須比坂 宇須比坂 宇須比坂 宇須比坂

名義一説唯日嶺と云ふ此地小野路一修く云又け尊東地  
たす唯日嶺と云ふ夜已の方眺く橋ををさるひ二より三  
吾孀者耶くや宮ひけ所ありと云ふ東の園を吾孀や  
ひあうりたる日本紀見くり嶺と云ふ向く日本方り  
於て峯より神社あり手向して通るる名ありけ嶺也





社 熊野

准日嶺

山崎子

山崎

山崎

中山

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎

山崎



西より坂東に入家境なり東海道の足柄山箱根山のや一確目なる事と  
見まはる哉後下総常陸上野等より一さしゆみ筑波山日光一山特小  
高く見えて一人

太平記笛吹休合歌云

新田武義守義宗と足利將軍の清運小退後して石川の合戦も幸志と  
達せざりしと武義園とあるあり誠信流を後小南と南信清と  
とりて花母りつる事と成安と打ちあつて其大田武と捕上板民と大  
捕先鋒と一合其勢二萬餘騎先朝義二の父上野親王を大將と  
て苗代清小おれ將軍小千原宗の合戦も幸成あり石川もあつた  
より一守りたるを馳奔りたるなりと其千葉介小山利友も其大將と  
一合其勢八万餘騎將軍の清運と馳奔りたる事と義貞義治七千餘騎  
母と足利と付ると事と武義ゆり新田義宗と上板民と捕一万余騎  
以て打ちつると事とゆくと向うをたれと評定あつた事と  
よ大敵も打勝るばかりなりと小勢の戦いとも退散と一せり流儀一違ふ

定て將軍内二月廿六日石川合戦とむと此府も是れは甲斐守  
源氏武田隆興も月刑ア大捕も貞徳理定武田上野等も月甲斐前  
司公始として合戦も千餘騎もと馳奔りたる事と月廿六日將軍苗代清へ押  
上りて敵の陣と見ゆり小松生原の事と小田原の山の南に陣小  
取て峯も六條の清旗と打ちあつると事と白旗中軍板根の事と  
の戦ひたる事と其戦ひも其戦ひも其戦ひも其戦ひも其戦ひも  
とて甲斐源氏二子餘騎とて押とせり新田武義守と戦ひも  
荒子の城攻勢も二子餘騎とて押とせり新田武義守と戦ひも  
速見入道以下宗信の甲斐源氏百餘騎討とせり引とせり二巻に  
千葉介宇都宮小山佐竹が勢もあつたりて七千と上板民と大捕  
が陣へ押上りて入ると戦ひも信濃勢も百餘騎討とせり是は  
宗子も二百餘騎討とせり相討小左友親と引とせりを両陣合とせり  
追ひて川其日の平割とて西陣の兵とせりを休む事あり終り



たり入書して分ち支小勢より大敵小物と鳥雲の陣小くあり  
 鳥雲の陣より先後小山とあて左右より水攻境より敵と平野小見  
 母為一我勢の程を敵に見せたりて虎責狼率のりく村より進  
 叛つて陣幸小鳥雲小南よりゆる敵を利有るりと武虎  
 若武者をば毎度度よりけりて大勢よりする同百發致ひ  
 千發より敵のやうにも敵目小あゆむ程の大勢をば新回上校はあ  
 ちりて笛吹峠へどり引上るる下野妻一きき  
 笛吹峠上杉武田合戦云  
 は武田大膳を交晴信を獲病めて引籠り移ひりば代官として  
 板垣駿河守松大將と仰一乗系左衛門尉詮を日向大和守小山田左  
 兵衛尉小宮山丹後守昌友逸見勝沼小曾南部小信列せり芳野田  
 下野守根本市幸清尉を指割られ其勢都合七子孫人十月四日甲  
 府をまき掃く掃く押留小日向と六月の巳卯小山室通の追分城  
 輝并沢をお越え笛吹峠を馳付たり上野方先陣を上回又次郎

本巻四十一

日本武蔵の雅日嶺  
 より辰巳の方次見守り  
 橋形をくく吾婿く  
 と云ふれ吾人の祥と  
 金石のてく後世までも  
 秘しける





見田五郎左衛門松田田吉なり既小三万二千餘人の軍勢先手は六百人  
笛原陣と此方へ去後陣を隠し備とまて作の彼方本押付より大將  
板垣信秋今日の先鋒と信秋はも作より去後陣より彼方へ向ふと信  
見上れば勢漸く三分一作は此方より去後陣の勢と信付て合戦  
を始んと討別を我に極まると勢の大勢陣と誠なる勢に急よ打て攻  
能せし一隊本陣知し未陣とさるる下初戦あり下急宮城といふ所に  
敵の先陣上田又次郎の先隊藤田丹後守を陣へ去扱を好く突て此  
三科肥前守廣瀬の左邊射一菱本陣に入ると勢小纏ひの士率ひ  
押まると突へて追ひまると戦ふると是を見くと回又公希後田付  
す小纏巻やして丹後守と下手にまるとお戦ふ後田士率と勇先白  
銃を抱く勢まると新を廣瀬の左邊生年十七歳と名をある丹後守  
也押入引退て両馬が同小馬のうらて去り勝負をわるとひは傍り  
難行く丹後松抱くお又首捲切く起上るは後田が從兵主と討せ居る

廿八也退取春廣瀬が即ち去後見と退く小纏市を敵の即退を  
中に取籠ると足下小五人突伏より殊甚傷城急と是非なく其場と  
敗走以上列勢は後陣と修と後と也と板垣急と切敵ふと  
大敵軍陣易くと旗旗四度踏本丸まると丹後守も早討れぬと  
いふ程と也と也者とも退くと也と板垣に下とるも是を見させ  
口が軍勢はもと後ひ来る勢は後とけ場とさしと也と押とる  
上列勢の二陣陣急集るとをさるるきたり者たし退てり武田勢  
の曲淵庄在處一菱本陣を今と然も能敵を討たると進んで攻む  
二菱本陣と曲淵小押とぬ剛兵急進の神城うは活れと問を能く  
馳入るとは陣のけ方は去後とる五子隊の軍兵立是も打く一戦小纏之  
られと右性左性不進走不陣固集と踏止ると守返はを心掛と付  
風情半て敗士を恥め居ると三科肥前守生年十九歳と名を相く  
ぬと心とく先手の所役者とせえんと是れ斯般軍小及くと上は不





切所也て公の儘よ返すもあらず見事なれど相争うもの如  
 迷小勝負とて教るぬ貴なりとも殿の古座お仕度といひ候ふ陰謀と  
 けり合ふ公將さるや昨是も互々陰謀お合せく惜く候ふと見る処よ  
 二科力定と踏み踏も陣布と突捨る軍人の内甲と突さく馬を  
 逆よそ落すりける肥前も右右の貴公さる事なり二陰三陰こも相争  
 拳動て別首分控等とけ松井田と控をえんさくは惣を信くは奥の振  
 舞うか是非返して討死をせしと究竟の者と馬前と連子備と唐  
 仍小ましく切所を越せ二母三本及討んとけお公衆承日向相本若田法  
 始くして朋勢と別と突るる中も上置を及ぶ白倉泳を命が首と  
 ころ已をく負引返く上枚勢散々に討負と作を越く敗ると退治  
 しく討死程小款の首級ゆる半一千貳百十九級武畧よんく小公もつて  
 大々勝其日の午刻よりて大將後河守信形勝岡の法武を執りせ  
 其身麻凡小腰をうけて軍政と奉りせり分封さるる主將の如くして



天晴美くし一帯見えて小舟舟

熊野権現社 熊野の権現ありは宮なりあり一帯の方小二王堂あり

信濃上野國堺 標杭あり

刈石坂十八所 坂險難あり

万葉

山の中身句碑あり

野井法をまのてまの板嶺のつは所あると想ひあはれ小舟

山かきあつてまの河を阻つてゆと登りてまの意田を

離まてくまの道はれいあまの道もまの一日の郷に降らま

新をあふり道はれいあまの道もまの一日の郷に降らま

一盞の酒は酔う道はれいあまの道もまの一日の郷に降らま

舟りてまの権現をまの山本村より刈石坂をまの観の案

に観ひ伯夷舟あり和と藤條を活きこけり下り坂十八所あり

路はるれをゆるげ坂本の秋の序

松井田十で二里半南駅五所 行民氣相對して巷をよみ

坂上 野 祭を巡りて散在に

横川 舟の流はりあまの青街樓ありこけり横川の

百合若足 糸石の道の側ありあまの世俗ありひの幸信に

射拔 穴の石あり今も丸く穴はあき射の射はるるあり

安中 安中まて一里三十所は歌を松枝ともり

八岐 八岐文の舟は舟舟あり是より妙哉山よ赴く

松井田 野

射拔 穴の石あり今も丸く穴はあき射の射はるるあり

安中 安中まて一里三十所は歌を松枝ともり

八岐 八岐文の舟は舟舟あり是より妙哉山よ赴く

松井田 野

射拔 穴の石あり今も丸く穴はあき射の射はるるあり

安中 安中まて一里三十所は歌を松枝ともり

八岐 八岐文の舟は舟舟あり是より妙哉山よ赴く

松井田 野

射拔 穴の石あり今も丸く穴はあき射の射はるるあり



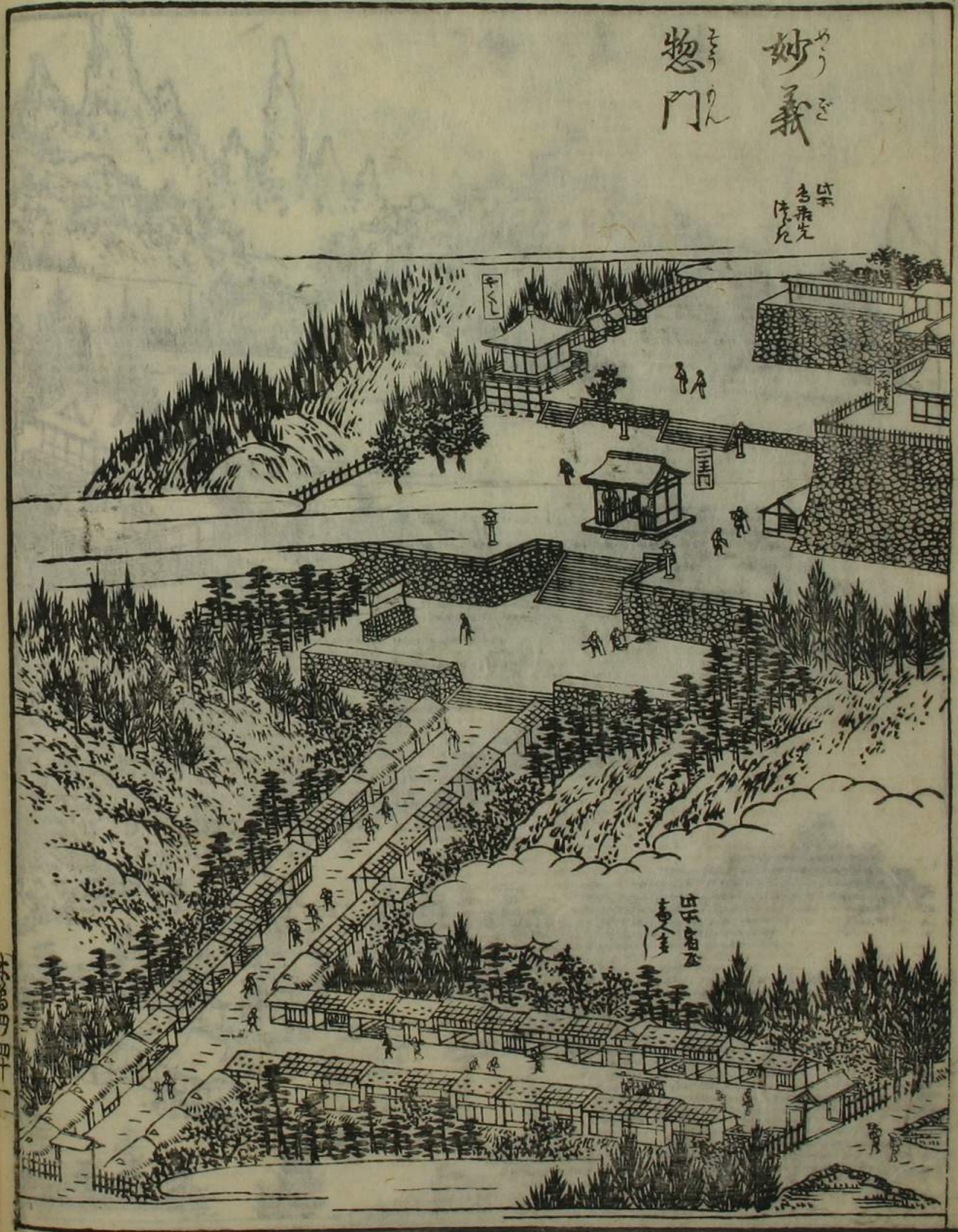
妙義山





妙義 惣門

山名 妙義



白雲山高頭院 俗小妙義山と号れ松井田より入る又横川

奉社妙義大権現 社殿 矢野 懸く

波古曾神社 山地主神

天神宮 太神宮 末社 八幡宮 大日

神樂殿 繪馬舎 護摩堂 淨香水あり

辨財天社 飯綱宮 觀世音 欽喜天

飯綱不動 巖窟 大荒神 中門 両脇あり

廻廊 巫女列を系清人母神 石階 百六十五段

御湯釜 隨身門 左右小座敷 石階 百段

鳥居 額白雲山 辨財天社 稻荷社 大黒天 人丸社

飛騨神 藥師堂 石階 二十八段 奉坊 石の石 橋 深川より

石階 九段 神馬舎 比下段の 惣門 二王城安ん

そ統高山と波古曾神社 姓古より此地主神より延喜帝の



浄土延曆寺第十の座主法性坊意僧正浄弁子菅坐相  
ゆふあれた左遷移をうれた幸に誓ひ台岳を退さけ妙義山小南岳  
し移す折は浄土を青岩峭壁として山移り出人偏小志しをき靈  
嶽より遷化の後あふ妙義権現と崇光貴賤の尊信意教は  
特小今より百五十年前奇特ありてそれより宮舎殿閣社藤井  
再興ありて日夜消人絶る幸ふ一幸坊と石塔院と稱して天台宗  
東叡山は属に例祭と九月九日山中にス杖七中あり何事も日尋  
五尋まわり有奥院と幸社より廿八所あり岩角をばさひ岩を  
大日尊成安に門前の旅舎と武所新形ありて山峯に書院を  
洞ひ消する人の宿りては去の成と一処より百餘人も泊りて能らひ  
いん方形一靈苑ありてとて関東の人民も好むとて教湯作らる  
に乃中を消人多し海川南必の靈地ありては山の十と廿と  
かた奇異の分野るれ神靈あり幸じとての所名よりの

靈あり板倉新まゝ志系ありとて我もこれなる

琵琶窪

板あり是より宮の窪もはあり

原一村

神明のありは近郷細細繩を

松井田をまき逢坂の神明あり是のうへ小志屋をまきなり妙

義山へ消するは横川より入るは地物又江戸より消する人

あはれをいへ横川へ出たりは琵琶の窪は板を越へ上流の菓

山王村は山王の原はありて八幸本村は親善堂あり原一村

一里山むらなるは安中の駅よりなる

板鼻まで三十町は駅を板倉伊藤守彦の領地ありて民家

十餘町あり其餘左右小あり

は駅をこき碓日川ありは次中宿の物離れありて又は川をこき

あはれは安中川より中宿成まきなる菓山の峯根成碓日

川流る意流たりなる菓山を切まきなるは崖岩山へ





野 板鼻

高寄中一里三十所は張氏居三田町をり相對して

其修を散在に

貫糸神社 板鼻の南の高き山あり一の宮と云ふ

八幡宮 八幡村ありありひり八幡を所新敷奥の安信貞任宗任伝成

例祭八月十五日

本社中央應神天皇 東神功皇后 西仲哀天皇 派おあふ

神樂殿中門 神あり 惣門 二天と 末社 山王 其外多し

本地堂 孫陀三尊あり

若宮八幡宮 上豊岡あり八幡を即腰掛石の旧俗と云ふ例祭三月十八日

鳥川 河原あり

板鼻ををり八幡むら後塚村に依回権現の宮あり豊田村を

経て見るとせば高寄川より遠く向うに瓜えりてせば日と原野

此菜の露より物と樹と木の影と雲と峯と松風と云々山の



うらね

神小

ひり

依地

乃世

乃

乃

盛



幸一きやせひつらみ深るる遠くの感懐は死がごとく

高上野

倉加野中を一里十九町は所と松平右系亮彦居城の地と  
城下の所長一凡二十町をうり繁昌の地といは國都會を地  
あて月毎小六夜の市あり第一上列箱館燧子白目竹とそ  
馬の鞍巾用其外種々の物出でて交易を賑ひいそぐさあり

佐野舟橋

舟橋燧蹟 佐野舟橋燧蹟 佐野舟橋燧蹟 佐野舟橋燧蹟  
舟本の記に佐野舟橋燧蹟あり

万葉

河苑

全系

後古

新後拾

東路の佐野舟橋燧蹟あり一帯は佐野舟橋燧蹟あり

夕暮小の舟橋燧蹟あり一帯は佐野舟橋燧蹟あり

とみ馴しはの中河津絶して流るるるる酒ありとあり

又月毎舟水とほらうて浮ぬれしりてせぬる佐野舟橋燧蹟

道なき佐野舟橋燧蹟あり一帯は佐野舟橋燧蹟あり

左文井

後雅母

源仲綱

佐盛法師

夫本

定家卿宮

佐野源左衛門恒世

佐野恒世

名高

佐野長者

佐野長者

新町

倉加野

燈台の里北をえをめふりてき程をい佐野の舟橋

佐野新府村あり新後年曆詳あり

佐野源左衛門恒世旧蹟燧蹟あり

佐野恒世が幸世の人には勝矣一特小舟本の端曲は幸之

名高一宿明寺殿諸國行脚の幸寧録あり其の後の

後りて端曲燧蹟も是くは旧蹟も後人擬へたものと見たり

佐野長者燧蹟 佐野長者燧蹟 佐野長者燧蹟 佐野長者燧蹟

新町中を一里半は款六十七町をうりはらて民衆相對し

巷松あり其の敷敷在は所より日光山の道厩橋の道ありは

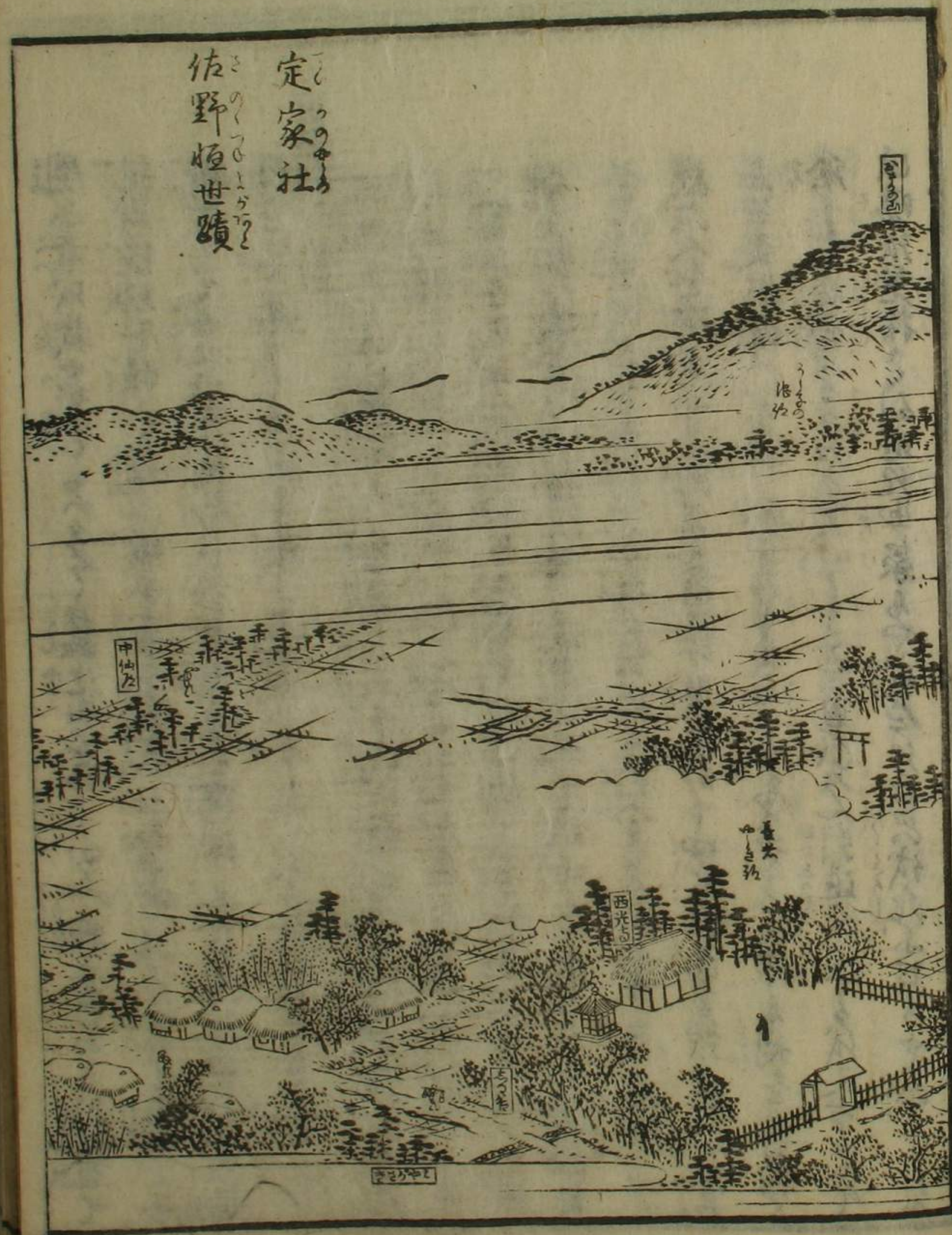
をうり新田村舟館林の道あり日光山の道厩橋の道ありは

てありて西川麓合して中津村より是利の乃あり赤木山橋名

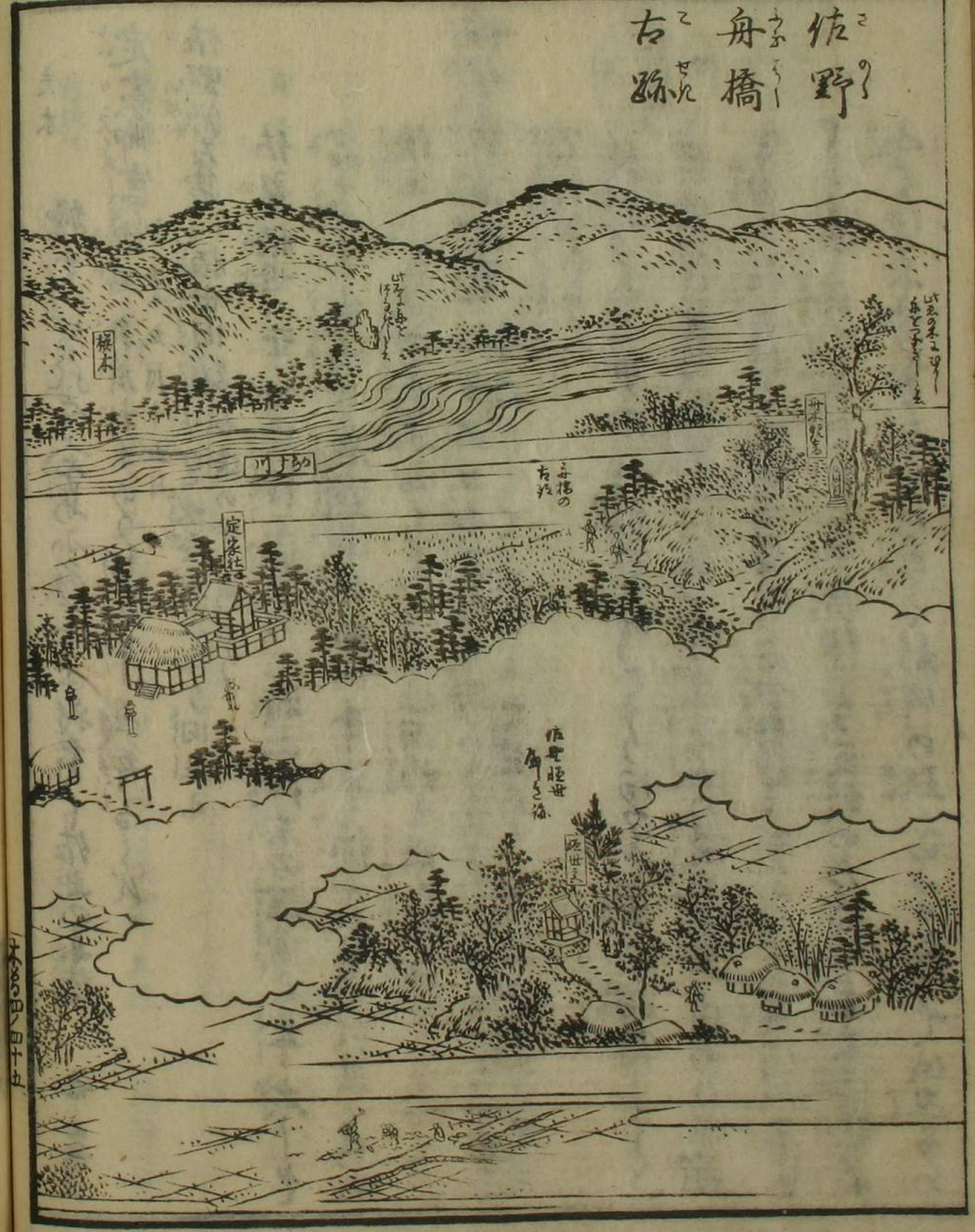
山を隔り小舟あり是を隔りて新町の駅ありて是あり



定家社  
佐野恒世蹟



佐野  
舟橋  
右跡





上列勝頼素直唐攻

園小素直我家宅より多く蠶書をいゝのみ嗣をさわこれと煮て  
糸を繰功を積む猶小織子唐の玄宗と宮中にて蠶を煮しめ  
嬪として女工の幸か知じび我朝も應神帝此沛代より呉服織  
婦の二女ありてお針を教く宮中もいゝおを給ひし幸あり

勝頼其日の装束ぬい着夜とく予代の腹巻宗後の羽織をきれ  
白無織の毛笠をききせしむる物も小土屋敷花が勇年服又市房  
一宮たきま主人の矢面も之寒く迎付故と云はれし後退り返り突  
合はまの棟太夫のいけの煙に海中に網を引退くと道とて也退治付  
合に早城戸を立合きく井取の内も引退る服又市房素直人ど  
故六人を相争ひし獅子奮迅の怒をいゝ四方に當り城前小一宮  
左を交ぬ津門を押し破りたきま又く小才も我と又市房視をけけり  
捨りて突合はるるたきま叶とて思ひ及ん引退んとすつ成又市房  
は場は見捨ると引退り出家も成たれ我は只成死せしやと恥し死

られくを得たりや取く返す所は清見中根石黒澤も我身とて若  
力と城せ捨服も悪行城も小土屋敷花と一字に城門も素直の者共  
が勝負も捕まどこの門の内も直や素直も入去を熱花一巻をきと名をい  
はれを原隼人佐土屋も先を越られりや押し破り素直も城を故三  
人と渡合せ張めぐる天晴ゆしと我見たりなる駿河先方の目尾  
那左衛門も素直も又市房も助けり小才も一日尾陣と其場小  
本と成りてなれは熱軍一夜も素直も小土屋城を失ひ一人  
残らば本丸も引へし時味方も息が休先幸丸も素直も我と我  
たりなる勝頼も素直も去るを去る安房守も素直も去る安房丸も  
水の手廓れありなる人々も去れ小氣と付は唯堅固ある幸丸と素  
直もや勇進む去る安房守も去る安房丸も素直も去る安房丸も  
素直も水の手廓れありなる人々も去れ小氣と付は唯堅固ある幸丸と素  
直もや勇進む去る安房守も去る安房丸も素直も去る安房丸も  
てせしんく母なる

けりきい武田勝頼軍記と  
けりきいなるなり





**新町**

幸庄中七二里高野六七町をり

民家相對して巷をりん

金鑽明神祠 御祭九月廿九日 此地の生土神とん

祭神 素盞烏尊 本社社の左右内外外社 楯高 杖葉  
清龍 楯現 楯横 祠 住吉祠 天満宮  
 其外 末社多し 幸庄堂 本初 寺 坂安 寺 舟の 龍 金鑽

上野 武義國場 あり

此河原より川をりりかひを宿かたむむく石神より  
 左の方より赤木山見ゆふふ士峯月似たりけ新立場之晩念寺  
 村なるく小橋村よりけ新立場より道あり左の森の中に  
 あくまに金鑽の原あり

**本庄**

源谷まで二里廿九丁け民居三三町げりり相對して

巷にあり祇園の神本あり六月廿七日祭あり

南原をりり傍尔堂村より上野武列國界の標多成建系成なる



以て大市あり人衆多群集して交易成あり事多し  
 そのより堰田ひく小山川常より橋あり岡の郷を以て六孫  
 を治りて事あり

岡部原 岡部村あり  
 岡部忠澄古趾 岡部村ありひくは比治の故郷なり  
 普濟寺 岡部村あり孫宗曹附

本尊釋迦三尊佛 忠澄墳 堂内あり又支那の本條  
 當寺あり 岡部六孫を忠澄は郷城領地してかの禪師  
 道徳を感し殿閣公造より幸す少く十一面觀音なりひく一百  
 餘の觀音を雕刻して安置し并忠澄之皇世一代敏達天皇の後  
 亂方り初と惡源を義平より属し平治元年十二月廿八日平重盛  
 と待賢門より觀ひて小武勇と稱ひ事永二年二月七日揚州  
 一宮の合戦小平忠茂を討く首級を得りて故郷勲功の美しとて

蓮生法師と  
 空佛門に入る  
 方は是も向來  
 東へ下ふも  
 虎馬より  
 易の道の  
 時人なり





忠度の米池五色と忠澄本賜の忠澄武列終父郡我郡村は岩嶂を  
穿ちて石室が宮と自像が石壁に彫り其傍小孫院と建ち  
忠澄菴と跡を又武列榛沢郡岡部小住して岡部を名乗る  
墳墓が築かれ忠澄霊神と作ると傳其外良徒の古墳が  
あり宗祇法師行御のといはれは塚のむらひて懐柔のわが法海に

深谷

深谷中より武里二十町は武里六七町は民衆相親しく  
巷はゆるい竹と左右に散在し  
宗祇法師  
我佛は小へく風神をさへ宗風を  
おとけはく佛法をさへ

親音堂

親音堂の碑あり其銘本日  
我佛は小へく風神をさへ宗風を  
おとけはく佛法をさへ  
此の事公初めりておとけやさうのま  
これを見よ  
はとちやくや柳を骨と形をまらわ  
宗風

熊谷

は武里のゆけは大本の移りて道の幅も廣くして村の  
は府本邊を志し東方に新部村と立場とて集居あり高  
柳を過く後松新田新島村あり極小むらびる市原に  
よるに熊谷の武より

鳩巢中より四里八町は武里三町は民衆相對して巷とあそび  
左右も所あり至くゆるい竹と左右に散在し  
は麓が島とて島と重忠の旧趾の城のわがは戸より島と  
十六里熊谷より幸多二里半南の方を永井へは二里半  
ありこれと赤城別當実盛とて一所に思を里半ありは有  
に赤城別當のありあり

蓮生山熊谷寺

蓮生山熊谷寺の宿中にあり傳云  
奉尊阿彌陀如来持念佛と改東阿彌陀佛の其一なり蓮生  
法作持



寺 熊谷



熊谷 直實 古跡



木名四ノ五ノ





蓮生法伴本像 安永 日墓 新治  
 抑然若津市直實と桓武天皇の孫風平盛方の子と若冠乃  
 と此開東に致さ久下直光の聲とある成長母序の武勇つらざる  
 して都待賢門の合戦も懸縁も我平に属し十六騎武者も  
 随一と唱ふる播磨の合戦も外本居れの恩賞とて右大將頼朝公も  
 若小鳩の役付する幕と為れを其介勢功乃感状並通すて賜る所  
 其後永永三年 甲辰二月七日拾列一告乃合戦も友を交敷盛と  
 討く首と賜る吾子直家と戦場をて見失ひ一討の想より敷盛  
 心の又母此形との心をやそのけつあれたをくく見ると其其托を帯ひ  
 其身弓馬の疾よ申し後生の思とも思ひばり行り敷公のこの意に  
 その後建久三年の冬久下指も直光と縁余よ於く武花園之下  
 独苦の境此糸海の後逆小誓瓜拂ひ豆列走湯心月く又翌年秋小  
 登り法然上人の御弟子とあり二公るれ合伴の行者と成小字其後



程危く元久二年故郷へ帰るに上之山願より久自画迎接の  
曼陀羅 希小 淨自他の御新法賜るの蓮生を後に入武列へ下り  
附不肯為方の行者とて仮初めを再成後せざるに馬車と運ぶ  
糸くは瓜壺せざるを蓮生法作の方

後去れと別者之沙法と人あむむて後々日は

建永二年九月四日午刻付生きたき佛勅が家よりや村里の辻に  
まをる果して其日及人ぞやよ喜樂聞く異香薫して眼を  
かみく性生し畢れ終に人として遠近の老若寄集むに痛  
麻のこゝ紫雲の子庵の上よ止居幸一時修りて西城にてまぬ  
これし不付生の靈瑞く後世天正年中情隨意上人中真用起有  
今の慈岩寺ことあり

本巻四十三

禪守弥三左衛門稻荷の神伴弘法大師此の直筆不斷伝尊あり  
て猛敵が討魔け陣頭も有り一付慈岩弥三左衛門と名を承り蓮生小  
力と添取ひ小勝利とけり特小一苔の合致も大手の先陣も向ひ稲と  
初りたるに彼人付過ひ加勢を志けれ録の凡不思議さ小其姓名  
弘回常に海が信むる所の稲荷神の意難を救ふの慈岩弥三左  
也現ト多そそ忽其あをを隠しゆ小即居塚に宮舎を築くは神と  
崇光今尚山に法守しとあり

当山什寶

- 放光名號 和歌名號 斧齋名號 弥陀三尊 真筆
- 直實兩持母衣旗名號 日真筆 理書 日真筆
- 阿弥陀佛 蓮生法作也 僧上寺學書大信正奉附 裸形弥陀 傳未
- 迎接曼荼羅 蓮生所持 慈岩弥三左衛門稻荷 神伴弘法大師也 幸比十一面六臂
- 蓮生所持後 内之弥陀三尊書 念珠 鐵鉢 証 以上 蓮生持物
- 十五遍名號 蓮生筆 送馬画 狩野信信筆 贊大細言實維那筆
- 壽牌 火防名號 不斷光佛名號 各 幡隨意上人筆







御製 殊數 幅隨意上人所持 子孫に置状 蓮生自筆

平經盛卿返状 訓閱集拔書 蓮生所持 運氣考其旗竿筆す法

幕 石橋山の勲功ふらむ 將軍頼朝公より拜領 騎鞍 蓮生所持

熊谷直實居城 戸田八所村より東行寺より一保寺ありん

東鑑云

治承六年六月五日甲辰熊谷二郎直實者。匪  
勵朝夕恪勤之忠。去治承四年。追討佐竹冠者  
之時。殊施勲功。依令感其武勇。給武藏國舊領  
等。停止直光之押領。可領掌之由。被仰下。而直  
實此間在國。今日令參上。賜件下文云云。  
武藏國大里郡熊谷次郎平直實所定補

所領事

右件所且先祖相傳也。而久下推守直光。押領  
事停止。以直實為地頭之職。成畢。其故何者。佐

又云

本名四五十四

汰毛四郎常陸國奥郡花園山楯篁。自鎌倉令  
責御時。其日御合戰。直實勝萬人。前懸一陣。懸  
壞。一人當千。顯高名。其勸賞件熊谷郷之地。頭  
職成畢。子々孫々永代不可有他妨。故下百姓  
等。且承知。敢不可違失。

治承六年五月卅日

久下

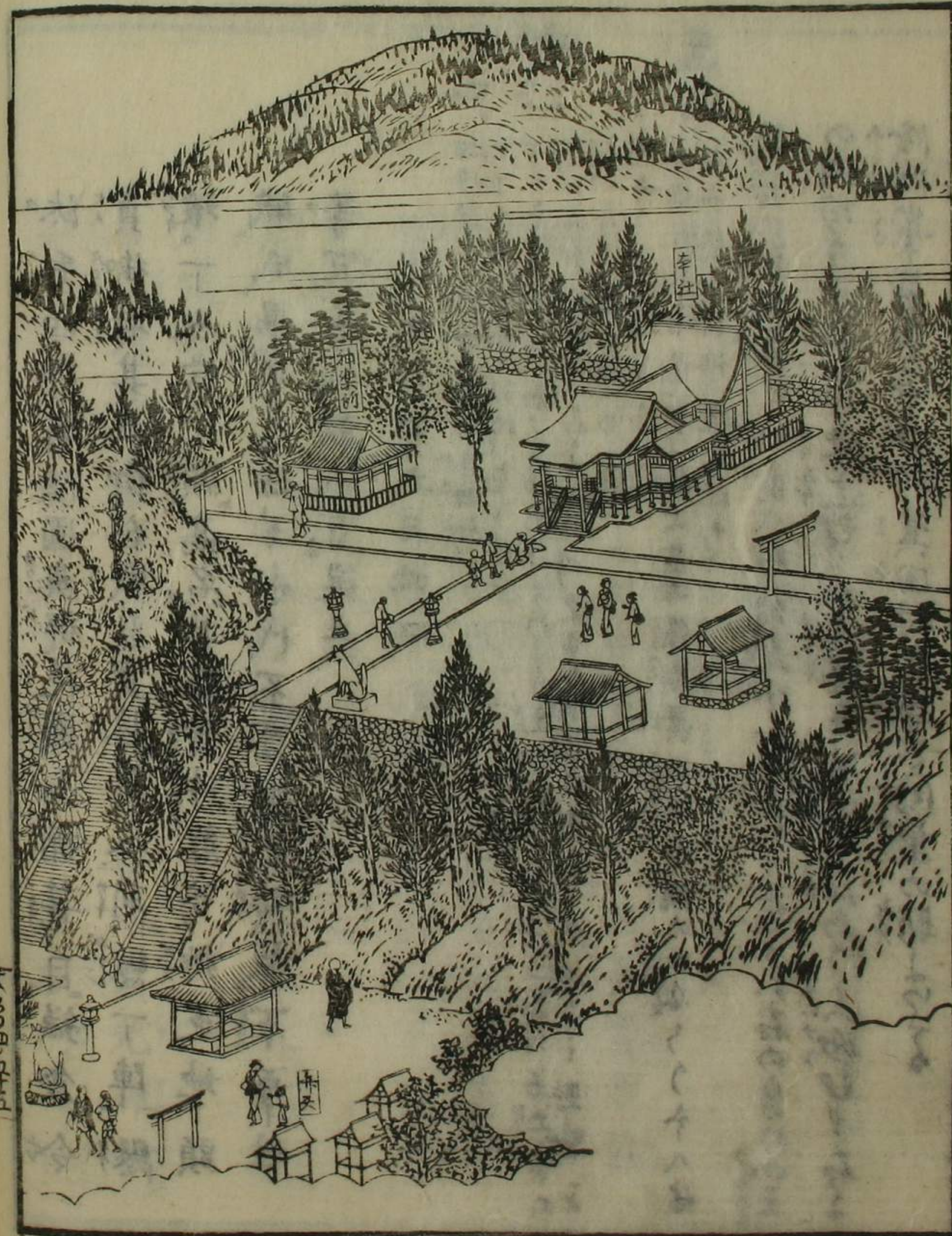
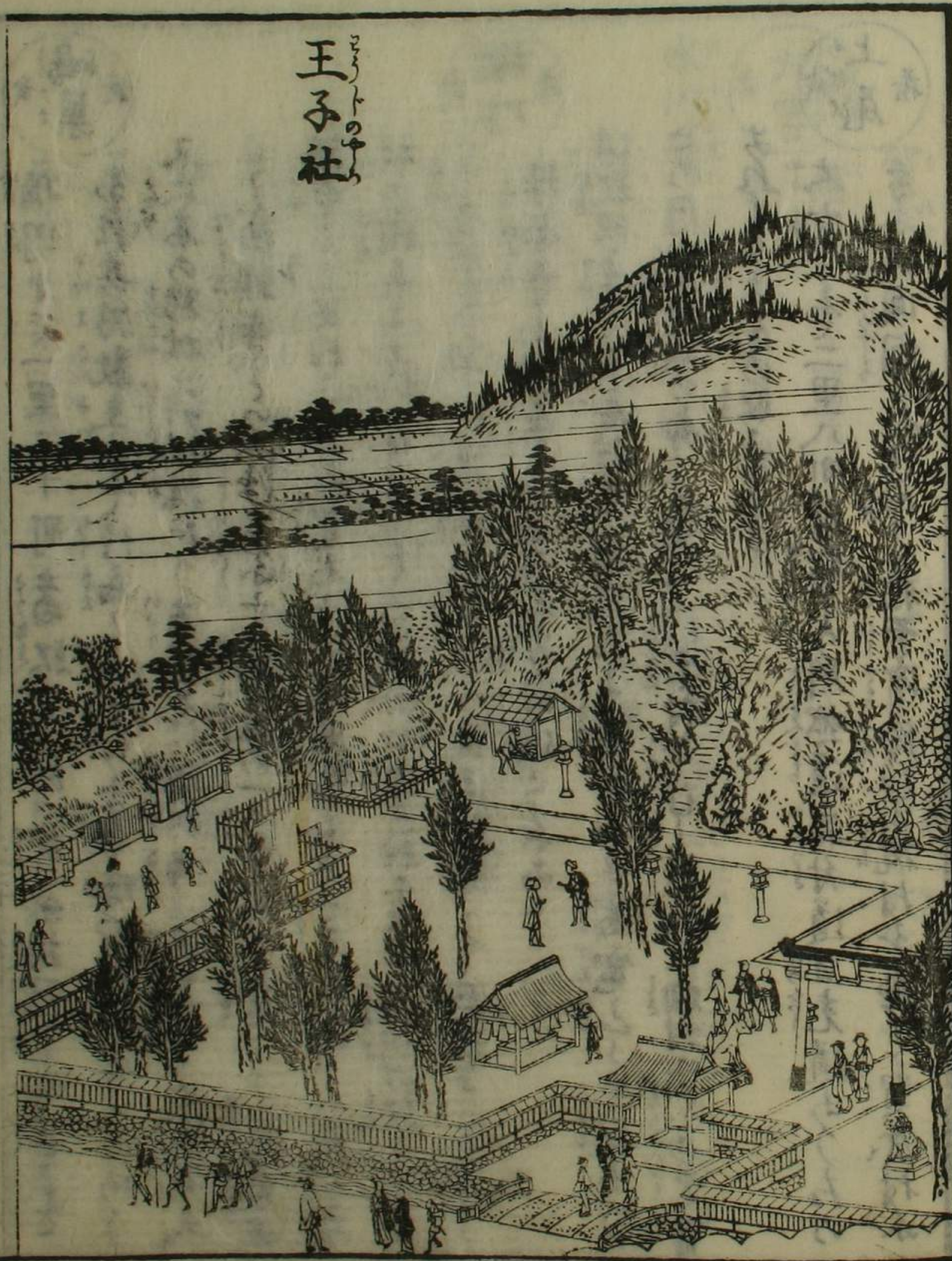
久下次平直實が伯母筆  
久下原山王の處にありて、土を以て通る所の  
下、みかたの所なり。右より川に足ゆり、上  
の榮を以て懸す。是處に

箕田

酒坊社親吉耆耄あり、融大匠の後胤、箕田源吾綱の古跡あり。今八岐  
宮にあり、念伴院に社あり。  
熊谷の跡、弘長より戸田八所村久下むらば、原より右の方、山王  
の祠あり。ここより、上むらば、是處ありて、榮あり、其砂むらば、  
淡間峯見ゆる中、并村箕田村を以て、淡間の驛あり。



王子社





武 鴻巣

桶川まで一里二十町 高野三十四町 氏家相對して 甚くを  
おれ其好敷敷して 浮岳一宿 葛味神の御 流り  
又大木の杉林大竹の林あり 左の方に 鍛冶 日光山の道有又  
ろふ勝願寺とて 浄土宗十八檀林の一ヶ寺あり 東に三軒 堂  
あるとて 上田村に 藥師堂あり 又清宮宮より 元徳 巢より 又  
神の御あり 多門寺あり とも 新田に 住持村を 桶川の御より  
上尾まで二十町 高野三町あり 氏家相對して 甚く宿り  
浄念寺とて 寺あり 又岩付の道とて あり  
け 歌城とて 所屋村あり 此方 窪村に 雷電ふとて 林あり  
この内は 雷電の御 あり 門前村に 瓜とて 畑村に 梨 堂有  
あれ 上尾の御より

武 桶川

大宮まで二里八町 け 野川 越道 岩付道 日光道あり 左の  
方 清宮 御あり 流り 葛味 所 鈴 梶 村を 居り 賀茂村に  
あり 上尾の御より

武 上尾

武 大宮

賀茂御あり 吉野村 草村 土 所 城 大宮の御より

浦和まで一里十町 宿の入り

東光寺とて 禪刹あり

氷川神社 大宮の御より 延喜式云 是 郡 氷川神社 名神 大月 次

桑神 素盞鳥尊 此所の生土神

女躰社 幸社の方より

五山社 大山社 中山社 麓山社 正勝山社

金鑽社 手摩乳 足摩乳の令

氷川王子社 神徳の備あり

末社 住吉社 布留社 神明宮

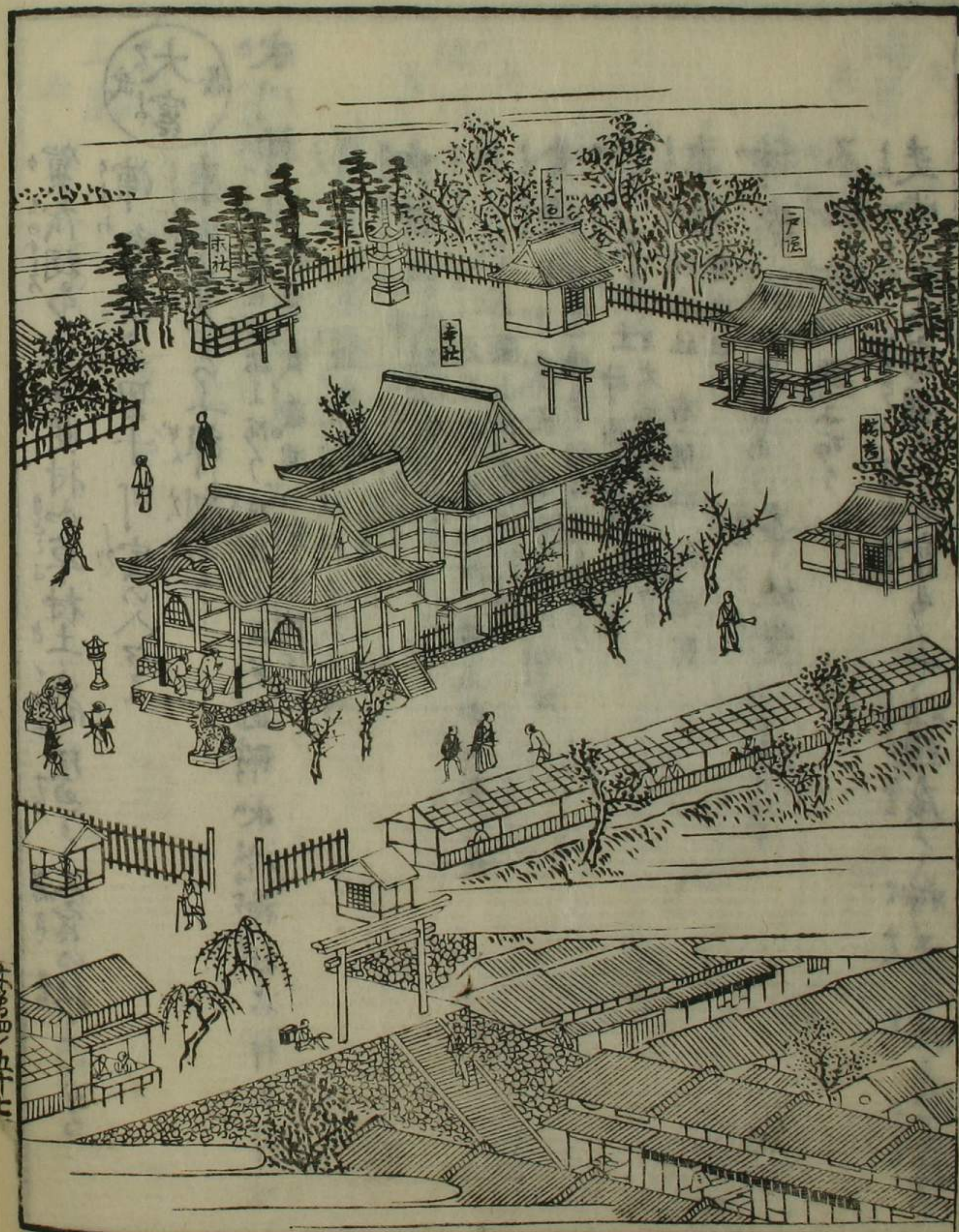
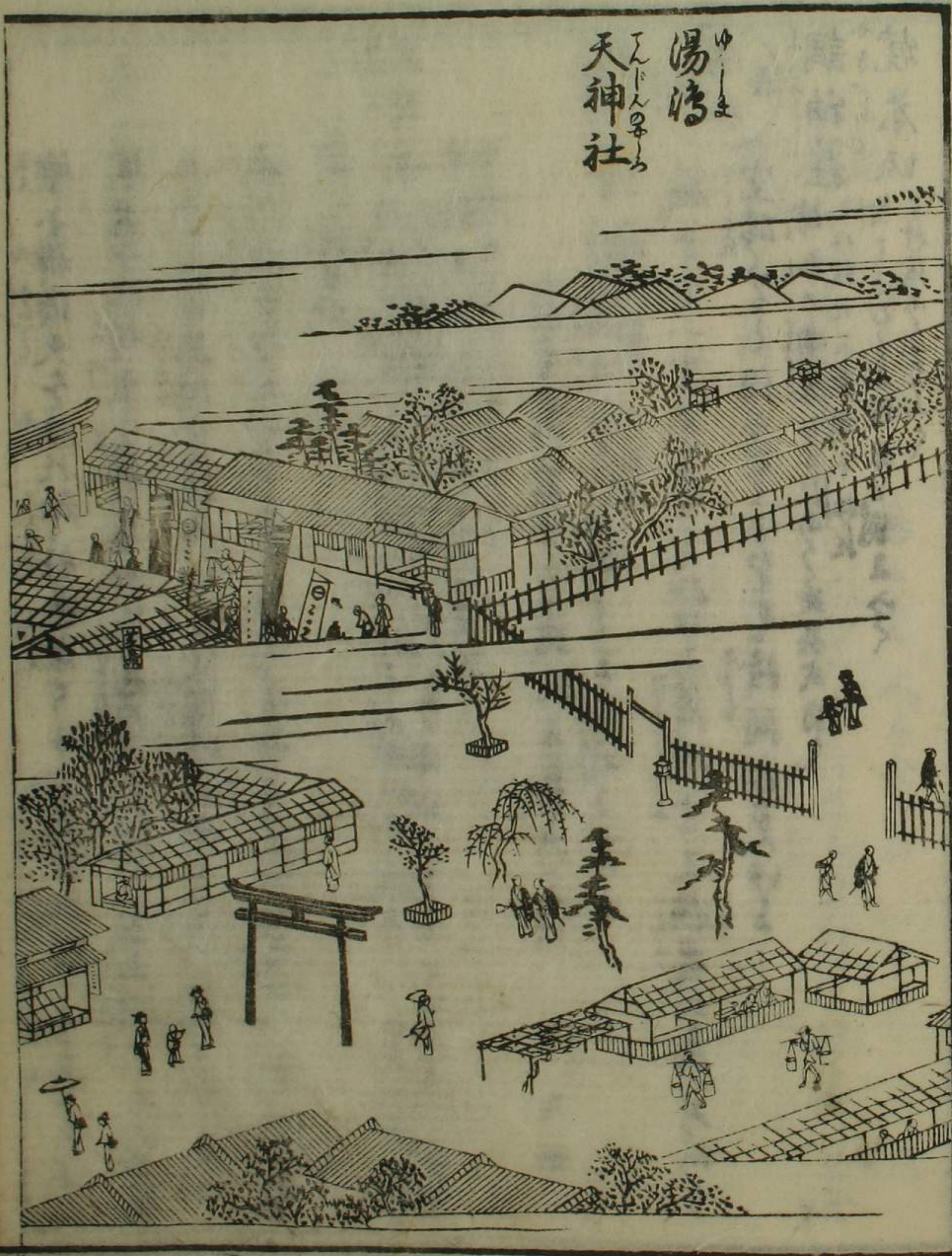
神樂殿 池の東にあり 幸地堂 池の西より

不動堂 日所より

支當社を 尚國の一之宮あり 社頭 廣く 神志の池あり 反橋有



中一  
湯  
天下  
天神社



大正四十九年



中ノ辨勳天を安に神ハニシ於森ハニシ然ハニシして並樹ハニシの松原ハニシ一帯ハニシ中ハニシを十八  
町ハニシ其中ハニシに神主ハニシ岩井ハニシ南井ハニシ智居ハニシ恒ハニシ一社ハニシ領ハニシ三百石ハニシ例ハニシ祭ハニシを六月十  
五日ハニシ申ハニシの吉國ハニシの大社ハニシありて諸人ハニシ陰晴ハニシを嫌ハニシひたハニシる不絶ハニシの事ハニシあり  
氷川ハニシ社ハニシ豊ハニシ江ハニシ府ハニシをハニシ不ハニシまハニシくハニシ可ハニシ見ハニシどもハニシみハニシかハニシ尚ハニシ社ハニシをハニシ勳ハニシ徳ハニシのハニシ御ハニシ神ハニシありて  
去ハニシるハニシ往ハニシりハニシ也

大宮原

野原の間に三十町許あり中程に並樹の桑畑ありこれ六圃見  
又子安の郷に三十町許あり地味の高山見ゆる若士原同  
甲斐武蔵下野甲斐上列伊香保  
なりてあざかり小見くより

夏も霧あふ士り法間且鼻乃さ記

馬明

針切村

若小郷合村あり此所よりを野原と云ふ也  
蕨中の一里半ひが北に小月隈宮又楠原の角あり

浦和

空晴るると此より上をも法間山見ゆる  
浦和の南郷あり此あり是亦武内也

調神社

此社北三萩郷と稱し  
焼茶坂 向より此小焼茶と鐵工あり

中江茶や麻きく人小も也

半残

浦和迄之く歩むると此白をこ村稱しを村過りて此終也  
権現の中流ありわびる村迄之く藤の郷あり

板橋中二里八町は驛民居六七所あり旅り

蕨

戸田川二十四町あり

秀曉

名を問たむれば一も此里女も非  
此驛をすれ之元りて此の野原此の戸田村ありて川端也  
子安の釋迦の坊を法道あり

戸田川

此河を過く志村より此より少く此坂あり下りて小郷あり

又此花坂をあら之ありて此河川村清水村ありて蓮沼あり  
藤吉橋の角一法ありて又小坂迄あら之橋切坂より板橋の

驛あり







武板橋

江戸日幸橋下で二里許に中仙道の東橋ありて所十所并あり  
所々小丸懸る形より紅粉を懸く花替なりてはねく  
美艶をかける橋子のうらゆれし旅客とあそぶ見くあれを  
知し真なるもまじり

類聚

思ひこもりも見るやたれは川上を流し玉章

類聚

平塚神社

板橋の馬の方平塚山あり  
別当安樂院蔵官寺と号し

系神

社を即義家實成次郎義綱三郎義光の三霊を  
奉りて三社とす

霞塚

平塚の霞あり義家の霞を  
奉りて三社とす

王子社

王子村あり別当と  
東院金輪寺とす

祭神

熊野三所神

王子社

王子村あり別当と  
東院金輪寺とす

祭神 熊野三所神

本巻六十六

寛永十一年 官家より清造と梅道春其記を書け例系七月  
十三日寺中十二坊額をぬけ

稻荷社

日村あり  
金輪寺の支那あり

飛鳥山

珠生の頃と雲と見く雲と散る花も神をんえりぬ  
白ひふ露れ夜ぬれ於く家為成とすともまじりぬ

白ひふ露れ夜ぬれ於く家為成とすともまじりぬ

無風花韻

風をたて動かぬ雲と見ゆか花の香もるる人の盛と

富士権現

別当あり  
郷社あり  
寛永年中に地

神明社

別当あり  
文治五年源頼朝公の系創く其後荒廢し小細のとありと

田畑八幡宮

別当あり  
文治五年源頼朝公の系創く其後荒廢し小細のとありと

根津社

別当あり  
神主伊吹氏

素盞烏尊

大己貴命 蛭子命 三所系

素盞烏尊

大己貴命 蛭子命 三所系





神田の社

本巻四六十一



當社を今の社より東の方へ移す本社の故址あり文明  
年中を田道隆の宗創し室永三年の辰 宮家より現ふ  
社遷すありて其祭の極月六日  
師遷すありてあり 祭九月廿一日

湯鴻 天満宮 別當北野山喜見院  
系神 菅公 文明十年を田道隆宗創に  
戸隠明神 祭日二月十日 十月十日あり

妻意稻荷社 湯鴻あり  
系神 日本武尊 橘姫 倉稻魂神 三座公祀  
日本武尊を東征し橘姫を東海に嫁して妻意稲荷社を創り

神田社 湯鴻あり  
系神 大己貴命 湯古を神田とてを神宮へ祀すを神供  
將門の靈を祀すといふ津波の神ありては世に  
美終あり今も系神の時は神農志をひの所あり

本巻四十三

神田社 湯鴻あり  
系神 大己貴命 湯古を神田とてを神宮へ祀すを神供  
將門の靈を祀すといふ津波の神ありては世に  
美終あり今も系神の時は神農志をひの所あり

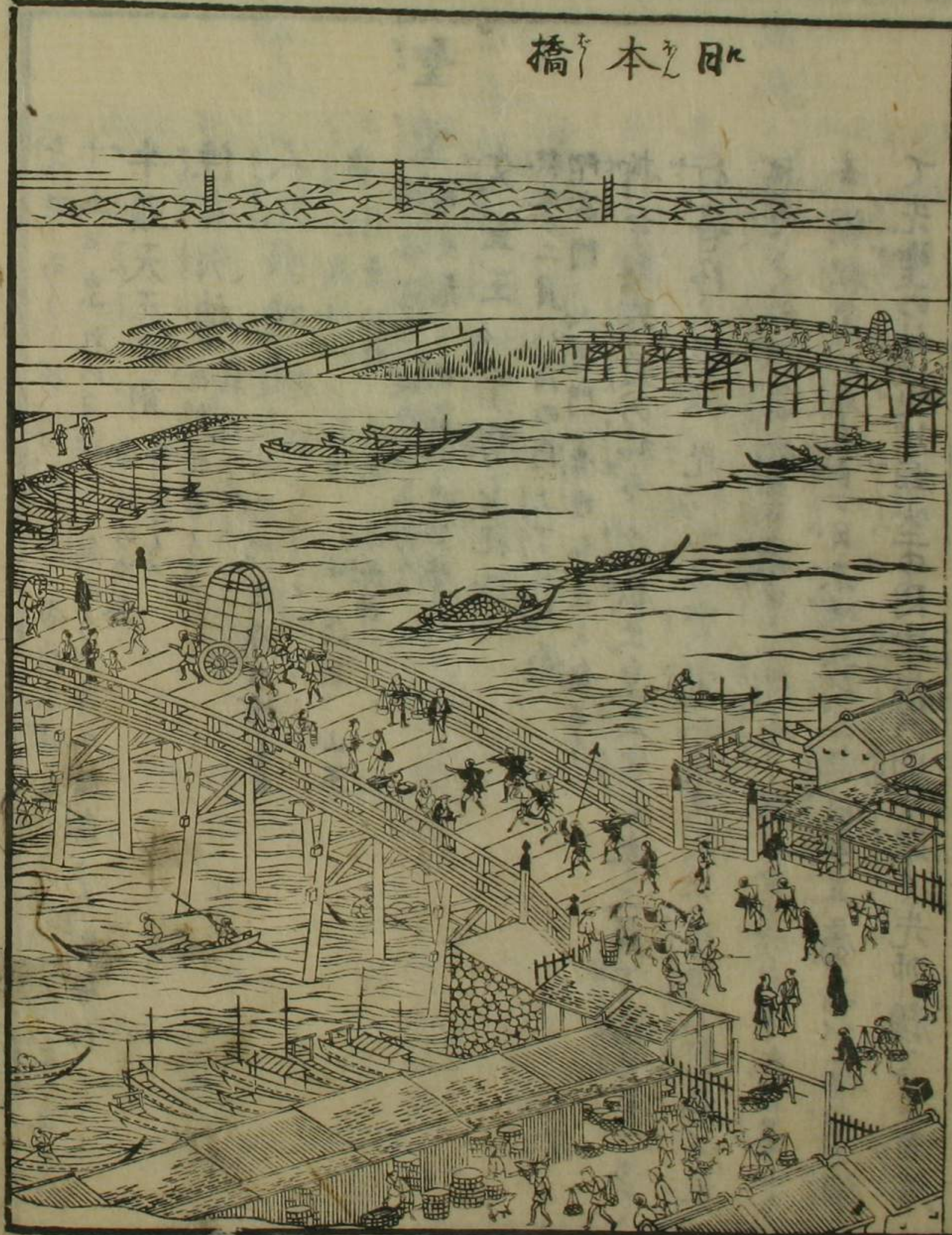
聖堂 湯鴻あり  
文宣王 并 十哲を祀す

行りせし其後 光仁天皇寶龜二年春大臣吉備公秋眞の具  
本朝秋眞の式を享日未明五列并社令其屬及び廟司と率  
て先聖の神座は廟室の内中楹の間を設く先師顔子と首座





橋本之町





中一岡子騫より以下丹有までを併て四座とて一文宣王の東河  
設て西を上座とて又東路より巳下子夏やその五座は文宣王の  
西に設て東に上座とて併て十一座何事も南に向て其外魚  
教等と六衛府よりこれを進む陳設の品々執事の眞教何事も延  
喜式に詳あり

板橋をまゝた本川越道あり右に難司谷護國寺四谷中への道  
あり直に北に平尾村を過り巢鴨町小立場の東にありたり  
六地藏堂ありこれ往くを駒込の町よりのところをいひて  
の方より白山権現の處へ迄を指し進みおとろ左と右側日光道右  
と幸郷筋より日幸橋より一里より近し森川宿に過り幸郷  
六所あり六所目本神田の處へ迄あり神田廣中宿左の方小湯宿  
天神の中より板橋より右の方小と聖堂筋遠橋の所見附をへて  
十町餘を過り日幸橋よりなり

本巻四六四

日本橋

は色の禰宿より一兩日ほどを越りて橋より舟のありて  
くぐりの狭路を過り橋の本宿より所々を舟に上りて神橋乃  
舟に後香取の神社息栖の神と指し麻橋まで舟を渡りて下りて交  
りてある三日遠路して神社名所が先づり又舟よりの延方には先く  
板久牛渡を過り麻生瓜屋を過り並木宿より玉造を過り小川舟中  
舟に舟を渡りて小畑より十二塚と登りて筑波山に詣りてまゝりて  
の狭路を渡りて日光山よりひよ中禪寺二荒より登りて下りて  
此の巻に記す

新古 武蔵野の舟も舟の果もふれりある風のまゝありん 通光  
日 舟末を舟をひくれば武蔵野舟も舟あり月陰 橋段と改定  
新設格 舟に指板より舟を白雲の舟死に舟も武蔵野舟 藤系長考

本曾路名所圖會卷之四 終



